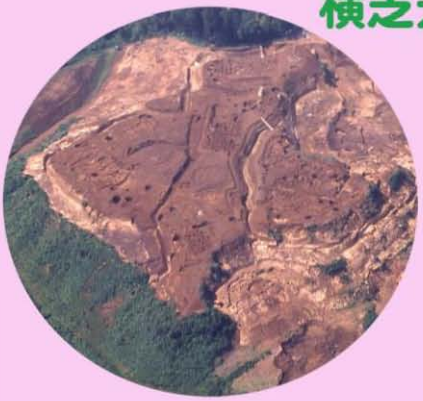
横芝光町
文化遺産ガイド
2

横芝光町教育委員会



はじめに

２分冊目は旧光地域の山側である。光地域の山側は、横芝と同じように国道から北側になり、横芝に比べて台地部分が少なく、台地が低地に浮かぶような景観で、独立丘となっている台地もあり、松島のような景色と思われる所もある。その分台地の上には遺跡が多く分布し、中世以降の遺跡も各地に見られ、それが現在も続いている所もある。集落の殆んどは台地の縁にへばりつくように形成され、中には中世以来の形を残している所もあり、お寺や神社にもその雰囲気を残していたり、中世遺物（板碑や仏像）や民俗芸能「鬼来迎」が保存されている所もある。また、それに関連して、中世城郭が高密度で分布していて、台地のほとんどに見ることができることである。さらに台地のみでなく、低地の微高地にも居館跡があり、中世にはこの地域が重要な拠点であったことが推測される。それに対して台地の間には低地が広がっているが、低地での遺跡は今のところ発見されていない。このような地域を、主に中世の遺跡を巡りながら歩いてみると、その特色が見えてくるかもしれない。

目　　次

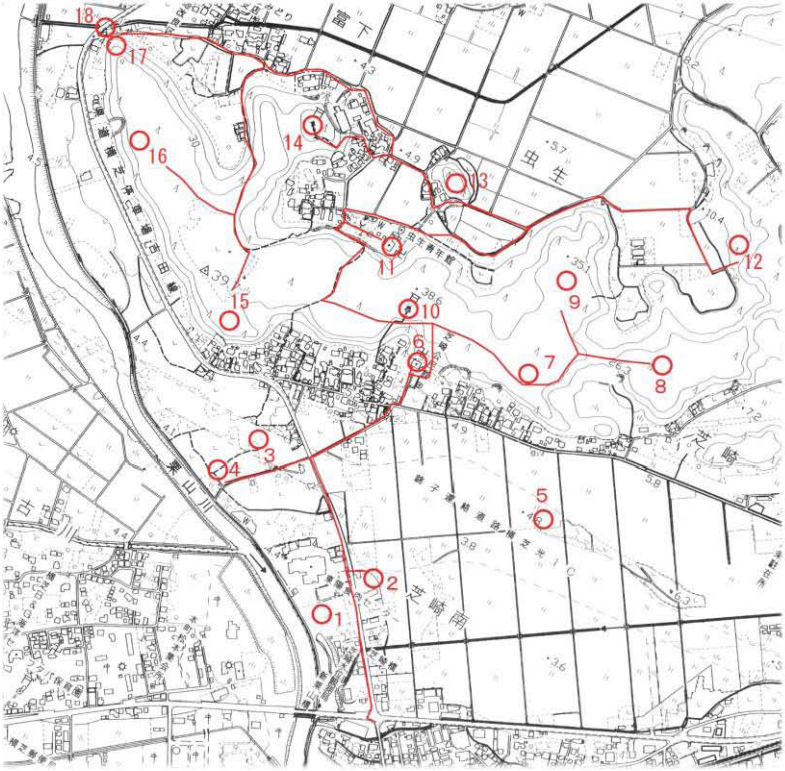
はじめに
目次
一．芝崎から虫生 --------1
二．富下・傍示戸・
　　宝米中島 ----------16
三．宝米・新井 ---------22
四．市野原から二又 -----32
五．篠本 ----------38
六．小川台・台 ---------63
七．小田部・母子から
　　芝崎東部へ ---------73

光地域北部の航空測量写真

一．芝崎から虫生

横芝駅前の十字路から東へ向かい、栗山川の橋を渡ってひとつ目の四つ角をまた左に折れ、北に向かうとJRの踏切、国道を越えると芝崎に入る。芝崎は栗山川が下総台地から九十九里平野に出た左岸に位置し、その集落は北風を防ぐ様に台地の南側の日当りの良い所に集住している。集落の中央には西蓮寺という最近建替えたばかりのお寺があり、裏山を登るとその頂きには八幡神社の社殿が鎮座している。芝崎集落の前面には沖積平野の水田が広がっていたが、現在は銚子連絡道の土手が視界を遮ってしまった。芝崎の裏山には古代の古墳や中世の城跡が点在し、古くからここに人々が活躍していた事が分かる。この山を越え、北側に下りると虫生集落の家並が見え、そのはずれに鬼来迎で有名な広済寺の古刹がある。

芝崎・虫生遠景



１．芝崎の砂丘

国道を渡って県道を200mほど行くと、左側に小高い藪に覆われた小山が見えてくる。そのすぐ西側は栗山川で、川のほとりになぜ小山があるのか、不思議に思われる。この小山は砂丘で、おそらく栗山川で運ばれた土砂が、九十九里沿岸流と風によって盛り上げられたものと思われる。栗山川左岸には、ここから河口付近まで点々とこのような砂丘が分布する。これらの砂丘は、かつてここが海岸であった事を示し、九十九里平野の成り立ちを考える上で、貴重な地形でもある。今は木々が茂り、初夏には鷺が営巣して賑やかになる。

芝崎の砂丘

2．芝崎地先十九夜塔

県道をさらに少し進むと左側に町営の食肉センターがあり、その反対側に水田の縁を行く小道がある。その小道を入ってすぐ屋根をかけた石仏が佇む。これは如意輪観音像を彫った十九夜塔で、像の肩には「十九夜女人中」「天保九戌年二月吉日」とある。この地区の女性が、水子供養や安産を祈願して、建立したものであろう。

芝崎地先の十九夜塔

３．芝崎の水神様

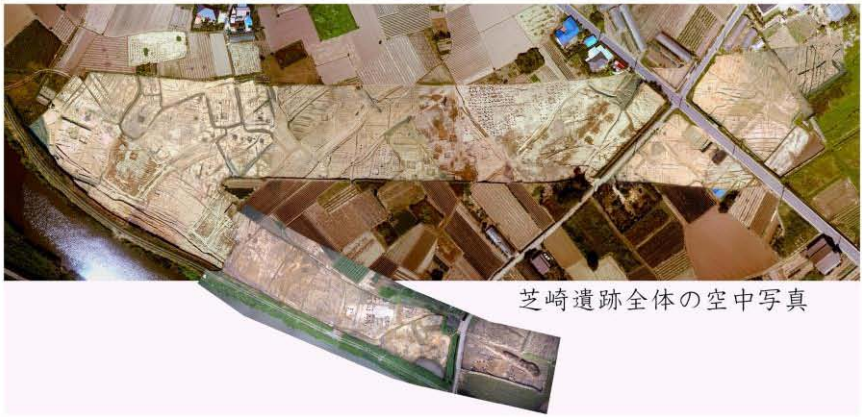
県道をまた北に向かい、銚子連絡道のガードを潜る手前に左へ行く測道があり、そこを行くと栗山川に出る。その土手から右に周ると、畑の中に１本の榎が立ち、その根元へ行くとそこに石祠が鎮座する。ここは水神と呼ばれ、この石祠に水神様を祀っている。地元の話では、この付近の栗山川には、上流からよく蛇が流れ着くと言われ、蛇は水神の化身とも考えられ事から、ここに水神様が祀られたのであろう。

水神様を祀った石祠

４．芝崎遺跡

水神様の所を含めてこの一帯は芝崎遺跡と呼ばれる古代から中近世の遺跡がある。ここを銚子連絡道が通るため平成12年から５年をかけて発掘調査され、奈良・平安時代の住居跡や畑跡、中世の建物跡・道跡等が出土、農村集落があった事が分かった。発掘では川に近いだけに、中には洪水に遭ったと思われる住居跡や、全体に畑跡が広がっていた事は、他に類例が少ない注目されるものであった。また、遺跡の中央部には平安時代の建物跡が多数検出され、官衙(役所)や倉庫、宗教的な施設等が考えられ、単に農村集落というだけでなく、もしかするとこの地域の中心であった事も考えられる。地理的にはここは栗山川と銚子往還との交差点に当たり、重要な結節点になっていたかもしれない。畑跡は畝溝として検出され、ほぼ方位に沿って走り、かつそのひとつの規模が方１町近く、条里制を意識して区画されたと思われる。

発掘が進む芝崎遺跡中央部



芝崎遺跡全体の空中写真

並んだ平安時代の住居跡

鍛冶屋跡

芝崎遺跡平安時代の畑跡

芝崎遺跡中央部の掘立柱建物跡群

縄文時代後期の土器

平安時代始めの食器

縄文時代の石器

長岡京から来た土器

緑釉の碗

平安時代の瓦

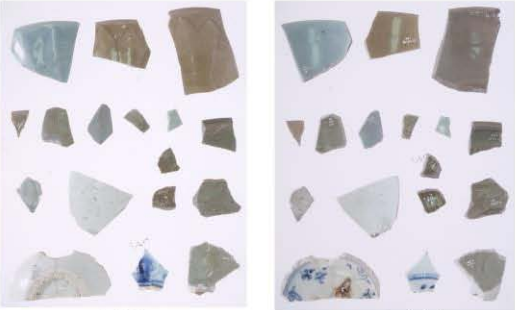
古墳時代の玉

平安時代の碁石

中世の道跡

戦国時代の堀跡

芝崎遺跡から出土した遺物には、古い方では縄文時代中期の土器・石器、古墳時代の玉、遺跡の中心となる奈良・平安時代では土器のほか、緑釉陶器や長岡京の土器、碁石など、変わったものがある。中世になると、中国製の青磁や白磁、染付、古瀬戸の碗・皿・瓶子、常滑の山茶碗・捏鉢・甕、渥美の壺、内耳土鍋、土器小皿、銭貨など、一通りある。



（表）　中国製磁器　（裏）

土器類

古瀬戸製品

常滑鉢類

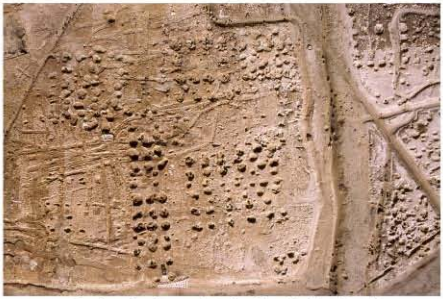
渥美・常滑袋物

5．中島遺跡

中島遺跡は、芝崎遺跡の東500mの水田の中、島の様になった砂州状の微高地にあり、東西300m、南北最大幅50mの細長い遺跡である。その遺跡の西部に平安時代の掘立柱建物跡群、中央部に中世の居館跡、そして全体に奈良・平安時代の畑跡が検出された。また、遺跡中央部からは縄文時代後期初頭の土器群と炉跡が出土し、今から4,000年前には既にここに人々が活動していた事が分かった。

平安時代の建物跡は、大形の建物を中心としてこれをコの字に囲む様に並び、南東部には同時期の枠を有する井戸があり、また、緑釉陶器や三足壺などが周辺から出土し、官衙(役所)の様である。中世の居館跡は周りを方形に堀が囲み、二つの曲輪からなる方形居館である。堀で囲まれた中からは無数の柱穴が検出され、何度も建替えが行われたようである。また、居館跡の南前面からは同時期の水田跡や井戸跡が検出され、当時の陶磁器だけでなく、木製品や漆器も出土した。

中島遺跡全景



平安時代の掘立柱建物跡群

平安時代の井戸跡

中島遺跡から出土した緑釉陶器

三足壺

「畔代(足代)」銘墨書土器

「片野」銘墨書土器

中島遺跡の中世居館跡

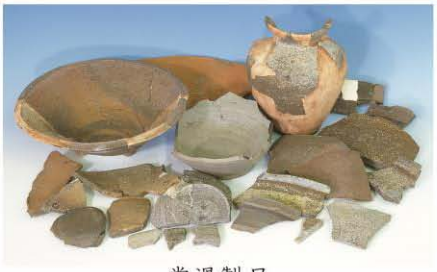
中世の中島遺跡では、中央部に堀で囲まれた居館跡が、大小二つの曲輪から検出された。曲輪内には多数の柱穴と池のような窪地、蛇行する溝があり、堀外からは井戸跡が発見され、珍しい木製品も出土した。陶磁器も多く、古瀬戸、常滑の他、中国製青磁もあり、これらから12世紀から15世紀に営まれた居館で、背後の山の古城との関係が考えられる。

中島遺跡の中世居館跡

中島遺跡の中世井戸跡

中島遺跡の中世水田跡

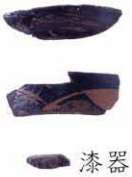
中島遺跡出土の古瀬戸製品



常滑製品

中国製陶磁器

線刻画のある砥石



漆器

石鉢と茶臼

木製品

6. 芝崎西蓮寺

銚子連絡道のガードを潜り、すぐ右に曲がって芝崎集落の中ほどに行くと、山の麓に芝崎西蓮寺が見える。本堂はまだ真新しい真言宗の寺院である。このお寺には、前の墓地と本堂裏に中世の板碑が立ち、また、以前の本堂の基礎にも板碑が使われていた。合計８点もの板碑があるのは最多で、この寺が中世以来続く、歴史ある古刹である事を示している。芝崎の遺跡、及び芝崎の山にも中世の遺跡(城跡)があり、お寺との関係を示している。

芝崎西蓮寺

西蓮寺の板碑群

7. 芝崎古墳群

西蓮寺の横から山に登る道をたどって台地の上に上がりきって、竹林の中を東の方へ行くと、山林の中にぽこぽこと土饅頭が見えてくる。そしてその先に芝崎古墳群と彫られた石碑が立っている。ここに大小20基余りの古墳が散在する芝崎古墳群で、この台地の標高は40m近く、ここからの九十九里平野の眺めは最高である。古墳時代人はこの眺めのいいここに、自分たちの守護神となるよう、先人を祀ったのであろう。

山の上の芝崎古墳群

8．古城跡（ふるんじょうあと）

芝崎古墳群の石碑の先を右手へ少し進むと、台地が細くなって東へ尾根が延びている。その尾根を進み、少し下ると尾根が突然切れていて、その先が高くなっている。この高くなった所が古城跡で、手前の尾根が切れている所が堀切である。古城跡はこの尾根からしか入る事出来ず、まさに要害城で、その呼名のごとくこの区域の中で最も古い城跡と考えられ、この城から眺める九十九里平野の中には中島遺跡がすぐ近くに見え、その居館跡との関連が想像される。古城跡の上には北側に土塁が残り、城跡である事が分かる。

古城跡

古城跡の堀切

9．中の城跡

古城跡からまた尾根を戻り、北の方へ行くと中の城跡へ行く。中の城跡は北へ延びる台地にあり、古城跡より比較的入りやすいが、今日は山が荒れて、なかなか進みにくくなっている。西側と北側にわずかに土塁が残り、城跡の面影を残すが、堀は埋って分からない。この城跡は古城跡に次いで新しく造られた城跡であろう。

中の城跡

10. 芝崎八幡神社

芝崎の台地を登った所まで戻ると八幡神社の社殿があり、その周りにも小さな鳥居が立って、石祠や石仏が祀られている。八幡神社は西蓮寺のちょうど真上にあり、寺を守る守護神の様であり、また、かつては寺と一体になって、奥の院とでも言えるかもしれない。八幡神は源氏の氏神として、また武士の守り神としても信仰され、この芝崎の山に城を築いた椎名氏が祀ったものと思われる。

神社の両側には子安大明神(子安観音)の石祠や容像塔が、裏手には天照大神と彫られ、両脇に道標が書かれた石塔が立ち、この前は東西往来の道ともなっていたのだろう。神社の前の道を西に行くと、左に台地を下りる方と、右に台地を横断する道とに分かれ、その先を行くと虫生の集落へと下りて行く。

芝崎八幡神社社殿

子安大明神の石祠

子安観音塔

天照大神塔

11. 虫生広済寺

山から下りると虫生の集落に入るが、そこは鬼来迎で知られた広済寺の門前で、右手には朱塗りの山門が見える。広済寺の開基は鎌倉時代とも言われ、この地域の真言宗寺院の中心ともなり、その格式を有している。しかし、広済寺より東1kmほどの所に鬼堂と呼ばれる所があり、そこに元禄年の石塔があって、そこが元禄年代まで広済寺があった所であろう。

広済寺山門

広済寺では毎年８月16日、境内山側の敷地に舞台を設営し、中世以来の仏教劇と言われる鬼来迎が同保存会によって演じられる。ここにはかつて地蔵堂が建っていて、堂の縁側と増設した舞台上で鬼来迎は行われていたという。亡者の面を被った塩振りに始まり、大序で閻魔大王、倶生神、赤鬼、黒鬼、鬼婆、亡者が勢揃いして、地獄の審判が行われる。

第一段　大序

第二段　賽の河原

第三段　釜入れ

次いで第二段は賽の河原の幕が開き、幼子の河原での石積みに和讃の声が流れ、観客の涙を誘う。そこへ鬼が現れ幼子を追い回す。その子を救わんと地蔵が出て、鬼を追い払い子供たちを連れて行く。

第三段はもう一つの地獄のエポックである亡者の釜茹である。鬼来迎では釜入れと呼ばれ、３鬼が女の亡者を釜茹にして食べてしまおうという、まさに凄まじい光景である。

第四段　死出の山

最後の第四段は死出の山で、鬼に追い立てられた亡者が山に登り、岩でたたかれ、また落ち、そこへ観音菩薩が現れてその亡者を救って、幕となる。

鬼来迎はこの四段のほかに、広済寺縁起を示した三段があるが、現在は演じられていない。これらを全て演じられると２時間を越える、大変な劇になる。始められた当時は仏教の庶民への普及、そしてこの地の領主の寺院建立と言ったものを分かりやすく、あたかも宣伝する様に筋立てが構成されている。そして毎年行われてきた事が、中世以来という何百年もの間続いたのであろう。現在ではこのような劇は全国で唯一であり、昭和51年、国の重要無形民俗文化財が新設された時、真っ先に指定された貴重な民俗芸能である。

12. 鬼堂跡

広済寺から水田を隔てた700m東の山の麓に、鬼堂と呼ばれている所がある。現在は山林になっていて足を踏み入れる事は困難になっているが、藪をかき分けて中に入ると、緩い斜面部に１辺５mほどの平らな土段があり、お堂の基壇である事が分かる。また斜面部の下の方には無縫塔とお地蔵様が横たわり、無縫塔には元禄年の紀年銘が見える。この事からここに江戸前期まで寺院があった事が考えられる。

鬼来迎の寺縁起譚によれば、ある時諸国行脚の僧がお堂に宿を取ったおり、夢で地獄の責め苦に喘ぐ娘を見る。その翌日そのお堂へお参りに来た地元の領主にその話をしたところ我が娘だという。そこで僧は娘の名を改め、仏教への帰依を深める事で娘は救われると説いた。

鬼堂跡遠景

また、地元の言い伝えでは、ある時空から鬼の面が降ってきて、その面を被った女が鬼になって、村人を襲い始めた。そこで村ではその鬼を捕らえ、お堂の脇にある井戸へ投げ込み埋めてしまったという。そしていつしかこのお堂が鬼堂と呼ばれる様になったという。

この鬼堂には、北部に薬師と呼ばれる所があり、西側の前面は池の様に湿地になっている。平成４年には一部発掘調査をして、中世の陶磁器や石塔が出土した。それらから鬼堂は元々中世からある寺院で、それは浄土式伽藍を有した大きな構えであった。それが江戸前期に火災に遭い、現在の地に移り、今の広済寺に繋がったと思われる。

鬼堂山林中に転がる
無縫塔と地蔵

発掘した鬼堂跡

鬼堂の南西方向の山上には古城跡があり、その古城の鬼門に鬼堂が位置する。かつては賑わっていただろう伽藍は、今は藪に覆われ、ひっそりとしているだけでなく、人の侵入を拒む様に、特異な雰囲気を有して佇む。

13. 丸塚城跡

広済寺のすぐ北側に小高い独立丘がある。周りは急斜面で岡というより小さな山である。周囲の斜面には段々があり、頂上は周囲に土塁が周り、南側に入口の切れ込みがある。小さい単郭の砦と考える事もできるが、芝崎城跡とか本城の出城として使われたかもしれない。

丸塚城跡

14. 田中砦跡・星宮神社

丸山城跡から西へ水田を越えた対岸の山を登って行くと、その頂上に木戸門の様に鳥居が立ち、そこを潜ると奥に神社が建っている。神社の境内はあまり広くなく、周りは土手の様に高くなって神社を囲っている。ここは田中砦跡と呼ばれ、周りの土手は土塁で、その外側に空堀が廻る、小さな中世城郭である。その中央に鎮座する神社は星宮神社で、千葉一族が信仰した妙見様を祀った社である。神社の左手の少し高い所には、石祠と三角頭の無銘石塔が立っている。この無銘石塔は中世の板碑の一種で、虫生では数少ない中世遺物である。この中世城郭を出て少し下がった所にも子安神社の祠があって、中に石祠が鎮座し、子育ての信仰が盛んであった事を物語っている。

田中砦入口

田中砦の中に立つ石祠と板碑

田中砦の入口脇にある子安神社

15. 芝崎城跡

田中砦跡から尾根伝いに行く事もできるが、いったん山を下りて西側を廻り込んで行くと道伝いに山へ再び登り、台地の南先端へ行くと芝崎城跡の土塁が見える。芝崎城跡は栗山川に少し突き出した台地の先にあり、周りを土塁で囲まれた不正形な単郭の中世城郭である。

芝崎城跡から西を眺めると、栗山川を挟んだ先には坂田城跡が望め、戦国時代、ここが栗山川の水運を守る要であった事が分かる。この城跡と連動する様に、眼下には芝崎遺跡の中に水神城跡が発掘で分かり、戦国期の陶磁器も出土し、立体的な要衝として形成されていたのだろう。

中央の山上が芝崎城跡

16. 虫生浅間塚

虫生の山の中にある浅間塚

栗山川と平行する様に北へ延びる台地上の中ほどの縁に、古墳と思われた塚がある。それを登ってみると割と急斜で、方形である事に気づき、おそらく浅間塚(富士塚)と思われる。地元ではもうほとんど浅間信仰は廃れ、ここに浅間塚がある事さえ忘れ去っている。しかしこの浅間塚に登って立って見ると、栗山川を挟んで遥か西方に富士山を望む事ができる。

17. 虫生路傍板碑

虫生集落から県道へ出る手前左側の山の麓に当たる所に、大きな飯岡石で造られた石碑が立っている。中央部に種子の梵字キリークが彫られ、上に天蓋、両脇に瓔珞が認められる自然石板碑で、町内では最大の中世板碑で、町指定有形文化財になっている。

虫生路傍の板碑

18. 虫生路傍石仏

県道に出てすぐ右側に、小さな屋根をかけた下に三体の石仏が並んで立っている。右２体は頬杖をついた如意輪観音で、十九夜塔である。左は憤怒の形相をした青面金剛像を彫った庚申塔である。集落の入口であり、すぐ横に小川が流れ、そのような場所にこれらの石仏が建てられたのであろう。

虫生路傍の石仏

二．富下・傍示戸

虫生の北、水田を挟んだ向かい側の山の麓には富下の集落があり、その山のほとんどが傍示戸と呼ばれ、その集落は栗山川に沿った西側にある。また、山の北側の小さな谷津沿いに傍示戸字若梅の集落が隠れる様にある。それぞれの集落にはお寺や神社があるが、その状況は様々である。山の上の台地上には九十九里地域水道企業団の浄水場があり、地域の上水道の重要な供給源となっている。傍示戸台地は東側で小川台に繋がるが、括れて切り通しとなって、独立丘の様になって周りは急斜で要害になり、その地形を利用して中世に城が築かれた。

富下・傍示戸遠景

19. 富下青年館前

虫生入口から県道を北へとり、向かいの山が見えて右の農協を過ぎ、左に入ると富下青年館がある。青年館の敷地にはそこここに石仏が立っていたり、転がっていたりしている。奥には墓地があり、ここに元はお寺があったと思われる。記録によると清照寺と呼ばれる真言宗寺院があった事が分かり、富下では東西にお寺が２寺存在した。石塔では入ってすぐ右側に五輪塔と宝篋印塔があり、左側の草むらには十九夜塔や馬乗り馬頭観音塔が埋もれる様にある。

馬頭観音塔

十九夜塔

五輪塔と宝篋印塔

20. 崖中にある小さな神社

富下青年館前を東に往き、県道へ出てすぐ左に鳥居が立ち、その先に崖を登る階段があり、その上に祠がある小さな神社である。近所の家の氏神様なのか、村で信仰した村社か分からないが、今はどの神様を祀っていたのかさえも遠い記憶になってしまった。

富下崖中にある神社

21. 富下金蔵院

県道をさらに東へ歩くと山側にまだ新しいこじんまりしたお堂が見えてくる。富下金蔵院と呼ばれるお寺で、最近本堂を建替えたばかりである。阿弥陀如来が本尊の真言宗智山派の寺院である。お堂の横には古い墓石を集めた無縁仏塔が築かれ、入口には庚申塔とお地蔵様が立っている。

庚申塔と地蔵

金蔵院本堂と無縁仏塔

22. 若梅青蓮寺

金蔵院前の県道を左へたどり、カーブを過ぎて300mほど北へ行くと視界が開け、左へ入る道があって、そこを行くと谷沿いの小さな集落がある。その間を入って行くと左側にお寺の本堂が、山の中腹の少し高い所に見える。これが若梅青蓮寺で真言宗の寺院であるが、今は無住となって誰もいない。

青蓮寺の本尊は大日如来であるが、本堂は締っていて拝む事はできない。境内にはいくつか石塔はあるが、墓地はない。小さな集落でこのようなお寺を守って行くのも大変であろう。

若梅青蓮寺本堂

23. 若梅愛宕神社

青蓮寺から少し谷を上がると、左側に鳥居と山を登る急な石の階段が見える。この石段を上がると、神社の社が山の頂上に建っている。これが若梅愛宕神社で、脇には樹齢の古い椎の木が生え、神社を守っている。

愛宕神社は京都北西の愛宕山に鎮座する神社を本社とする火伏の神で、山岳信仰の対象ともなって、修験道の道場として各地に勧請された。そのためここも山の上に社が建てられたのであろう。

若梅愛宕神社社殿

24. 富下惶根神社

愛宕神社の下の道からさらに坂を上ると台地の上に出て、畑を挟んだ南の杜の中に社が見える。これが富下惶根神社である。椎の木の大木に囲まれた中に覆屋の下に本殿があり、その前に拝殿がある。本来は富下の集落から上がる参道があるが、急坂で今はほとんど使われていない。惶根尊は女神で、面足尊と対になる神である。

富下惶根神社本殿

25. 富下大師

惶根神社からもとの道に戻って西へ行くと浄水場があり、その手前の畑の中に祠のような屋根の下に、石の大師様が鎮座している。なぜこんな畑の中にお大師様がぽつんとあるのか分からないが、この場所が富下地先で、惶根神社の裏手に当たる所から、神社に御参りしたついでに、大師参りをしたのかもしれない。年代は分からないが、石の作りからして明治以降のものであろう。

富下宮後の大師

26. 傍示戸城跡

浄水場の沈殿池を廻り込んで、台地の南西端へ行くと、土塁の一部が見られる。ここは傍示戸城跡で、平成16年に浄水場の拡張のため発掘調査され、中世の空堀や居館跡、地下式坑等のほか、古墳時代の住居跡も検出された。傍示戸城跡は文献等では全く記録がなく、誰が築城したか分からないが、発掘で出土した陶磁器から15～16世紀初めに存在した事が明らかになった。調査地からは空堀で分けられた区画に居館である建物跡の柱穴が多数検出され、その脇からは地下式坑や粘土貼土坑などの中世遺跡に多く見られる遺構が検出された。陶磁器は古瀬戸や常滑に混じって中国製白磁があり、他に硯もあって、資力を有した武士団が居たと思われる。

古墳時代住居跡は６～７世紀の後期で14軒、掘立柱建物跡が１棟あって、ひとつの集落を形成していたと思われる。台地の北部に古墳があり、それとの関連が考えられる。

傍示戸城跡

傍示戸城跡の中心部

傍示戸城跡から出土した陶磁器

27. 寅間台古墳

浄水場の機場建物の横を廻って北側に行くと、畑の中に小高い高まりがある。これが寅間台古墳と呼ばれる遺跡であるが、1基だけであるのではたして古墳であるか調査してないので分からない。古墳と言えば傍示戸台地の東にある小川台には、10数基の古墳を有する小川台古墳群がある。それから推測すると、この台地にも本来もっと古墳があったかもしれない。

寅間台古墳

28. 傍示戸成就院

浄水場正面の坂を下りて行く途中で左に入る道があり、そこへ行くと小さなお堂と墓地がある。ここが傍示戸成就院で真言宗の寺院であるが、今は本尊を安置する小堂があるのみである。小堂の中には本尊である木造阿弥陀三尊立像のほか、阿弥陀如来や如意輪観音、菩薩形像などの木造の仏像があるが、どれも荒れていた。境内西側は墓地になっていて、その中に地蔵や観音の石仏が横たわっている。

成就院小堂

成就院境内の石仏

本尊の阿弥陀三尊

29. 傍示戸石仏群

成就院の南出口から道路に出る所に、数基の石塔や石仏が立っている。右から十九夜塔、地蔵を彫った念仏塔、横たわった庚申塔、奥には墓塔が立っている。これらは江戸時代の石仏で、砂岩や凝灰岩製で、木の下にある所から、苔むして古く見える。

傍示戸石仏群

30. 石芋大師堂

傍示戸石塔群の道路を挟んだ向かい側に、小さなお堂がある。中には石造の大師像が安置され、このお大師様を石芋大師と呼ばれている。昔、ある僧がここに寄ったおり、地元の百姓が芋を洗っていたという。その芋が余りにもおいしそうだったので、その僧が分けて欲しいと乞うたが、百姓は芋を僧に分けなかったという。僧が去った後、百姓は芋を煮て食べようとしたが、石の様に硬くて食べられなかった。後にこの僧が弘法大師だと分かり、大師の因縁だという事で、大師像が造られ、ここに祀られたのであろう。このような話は全国にあり、おそらく中世から江戸時代にかけて、高野聖が弘法大師の伝説を広げたものと解釈されている。

石芋大師の小堂

31. 傍示戸星宮神社

旧道を北へ行くと右手の山の麓に鳥居が見え、小さな神社が鎮座している。これは星宮神社で、妙見様を祀っていて、千葉氏に関係する神社と思われ、山の上の傍示戸城跡と係わりがあるのだろう。

傍示戸星宮神社

32. 傍示戸の小社

旧道をさらに北へ行くと、山に上がる小道があり、そこへ行くと上がりきった所に、小さな社が建っている。この神社の祀られている神様は不明で、神社名も分からない。

傍示戸の小社

33. 傍示戸庚申塔

傍示戸の北のはずれで、橋を渡る手前の右側に、高さ2.2mの立派な庚申塔が立っている。庚申塔では町内最大であり、砂岩製の塔身には青面金剛に三猿が彫られ、笠が載せられている。宝暦の紀年銘が読み取れ、今から250年も前の江戸中期の塔で、野ざらしながらきれいに残されている。また、脇には小さな道祖神の塔が２基並んでいる。

庚申塔と道祖神

34. 宝米中島薬師堂

橋を渡ると宝米の中島であるが、この小さな集落の中に薬師堂と呼ばれる小さなお寺がある。ほとんど掃除もされてなく、半ば朽ちて倒れそうであるが、周りには墓地もあり、大師堂も横にある。本尊は薬師如来と思われるが、中にはもう何の仏様か分からない小さな木造があり、脇には町内では珍しい十二神将像がある。境内には古そうな石塔もあり、江戸時代から続くお寺であろうが、今は寺名も分からず、朽ちようとしている

薬師堂の本尊と思われる木像

中島薬師堂

十二神将の一部

境内にある木造大師像

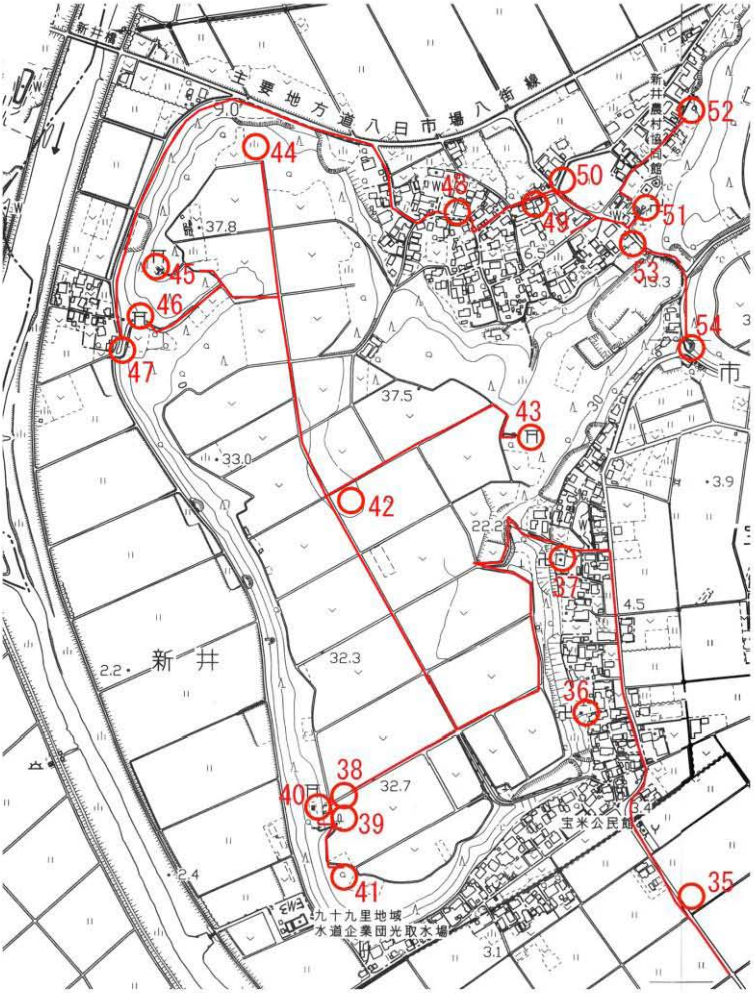
三. 宝米・新井

傍示戸から北を眺めると、テーブルのような広い台地が迫ってくる様に横たわっている。その台地の南から東側の裾に、宝米の集落が広がっている。台地の上は一面畑で、北の方で少し高くなって起伏を有するが、ほぼ平らな地形である。標高は南部で32m、北端で38m弱あり、南の芝崎より低い。これは下総下位面段丘の台地で、周りの侵食が少ない事から、広い平坦な台地となっている。

この台地にもかつては古墳が点在していたが、昭和30年代の開墾でほとんどが破壊されてしまった。また、台地の縁には神社が４社あり、そこだけは鎮守の杜が残され、古木が茂っている。寺院は集落の中にあり、宝米には２寺、台地の北側の新井には１寺が今もある。

新井は台地北東側の入り江の様に半分山に囲まれた低地に集落が形成され、戸数70軒ほどがひしめく様に小路に沿って立ち並んでいて、昔からの集落景観は変わっていない様に思われる。その集落の中には小さな観音堂があって、それは個人所有と言われ、村の寺は東のはずれに墓地とともにある。

宝米・新井台地遠景


主要地方道八日市場八街線
新井
宝米公民館
九十九里地域
水道企業団光取水場
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54

35. 宝米十九夜塔

宝米中島から道を北へ向かうと、道の右側に屋根を付けた石仏が水田と水路の脇に立っている。ここの十九夜塔は町内では珍しく、駒形の本体の上部に小さく如意輪観音が浮き彫りされ、その下に大きく「聖如意輪観世音菩薩」と文字が彫り込まれている石塔である。高さは72cmあり、少し欠けている所があるが、屋根が掛けられ、今日も信仰の対象となっているようで、吹き曝しの中、良好な状態で立っている。

宝米水田中の十九夜塔

36. 宝米西徳寺

道が集落に当たると鉤の手に曲がり、少し行くと左に入る小道があり、その奥に小さなお堂が建っている。このお堂、阿弥陀堂とも呼ばれ、かつてはここに町指定木造阿弥陀三尊像が安置されていた西徳寺と言うお寺である。現在阿弥陀三尊像は近くの明光院に保管され、お堂はもぬけの殻である。お堂の前には廻国塔や如意輪観音の十九夜塔、地蔵などの石仏が佇み、右奥は墓地となっている。また、お堂の裏手には足尾大権現と文字が彫られた石塔が数基あり、これは茨城県石岡にある修験の山を信仰したものである。

宝米西徳寺の阿弥陀堂

木造阿弥陀三尊像

2基並ぶ十九夜塔

廻国塔

37. 宝米明光院宝蔵寺

道をさらに北へたどると左側山裾へ上がる道があり、そこを入るとすぐ左側に山を背にしたお寺がある。ここは明光院宝蔵寺と呼ばれ、境内への入口の両側には六地蔵が迎え、小きれいな本堂と境内の庭が、里のお寺の雰囲気を醸し出している。境内には室町時代の板碑が立ち、中世から続く古刹である事を物語っている。板碑は方形の黒雲母片岩の板石に、二つの区画線の中にキリークの種子が二つある双式板碑で、下総型板碑のひとつの典型である。また、境内には如意輪観音の十九夜塔と地蔵の座像石仏がある。こちらはどちらも江戸期のものである。さらに境内の一角にはお稲荷さんも祀っていて、江戸時代のようなお寺である。お寺の道を挟んだ北側は湿地があって、地図を見るとここは元々弁天池と呼ばれる池で、その脇には弁天様を祀ったと思われる石祠が立っている。

明光院の入口

町指定明光院板碑

弁天池と石祠

十九夜塔と地蔵

38. 宝米台地の庚申塔と馬頭観音

明光院から坂を上り、台地の上に出て、そのまま真直ぐ中央の道に出ても良いし、眺めの利く台地の縁を歩いて西側の縁まで行くと、石塔や小堂が立っている一角がある。その曲がり角に庚申塔と馬頭観音の石祠、ほかに道標らしい石塔がかたまって植え込みに隠れて立っている。ここが元々の街道筋であったのだろうか。

宝米台の庚申塔と石祠

39. 宝米台の小社群

宝米台地の南西隅の庚申塔とは向かいになる所に、小さな社が２座並んでいる。またその社のはす向かいに護国神社の社があり、神社群の様になっている。護国神社以外は何の神様を祀っているか分からないが、村から外れた所にかたまって神様を祀っているのは、神聖な所と言う特別な意味が在るのであろうか。このすぐ後には村社である大棟梁大神の社がある。

台地縁にある子安神社小社など

40. 大棟梁大神社

小社群の前を南へ少し行くと、左に下りる道があり、鳥居が立っていてその奥に大棟梁大神の社があり、手前には杉の大樹が２本生えている。杉は幹周り３mほど、高さ20mに達すると思われ、町指定の天然記念物となっている。

大棟梁大神社は全国的に見てもここのみで、祭神は経津主命で、元は香取神社であったと思われるが、いつから現在のような神社名になったのか分からない。境内にはこのほか、三峰神社などが鎮座する。

台地から少し下りた所にある大棟梁大神

41. 宝米台の古墳

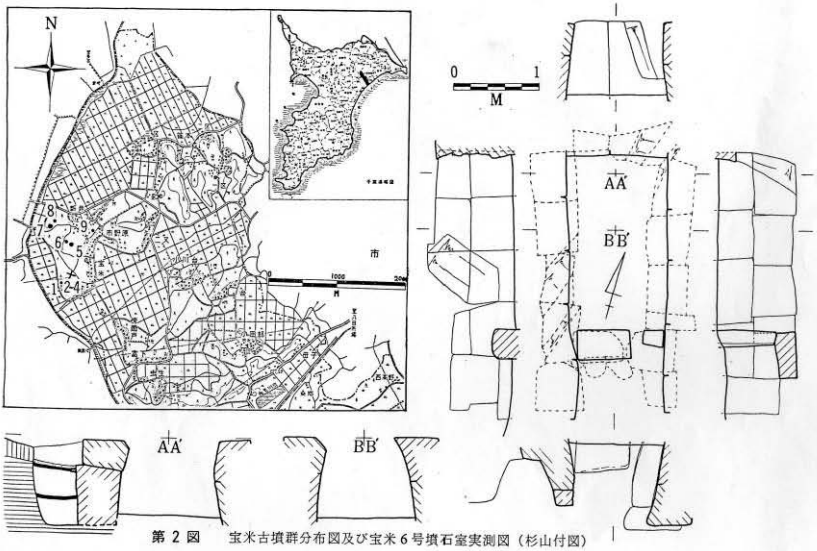
宝米の台地はかつて多くの古墳があったと言われるが、昭和30年代の開墾の時、その大部分が潰されてしまった。その時の１基は調査され、わずかながら記録が残っている。また、この台地の南端には、古墳と思われる小山があり、残された古墳のひとつと思われる。

台地南端に残る古墳

42. 宝米遺跡

宝米の台地は　南北1000m、東西400mの広さがあるテーブル状の独立した丘で、標高35m前後のほぼ平坦で、現在は全体が畑地となっていて、雄大な広さを見せている。かつては山林でその中に古墳群があったが、昭和30年代に開墾されほとんどの古墳は破壊されてしまった。現在は旧石器時代、奈良・平安時代の遺跡として残され、畑を見ると土器片などを見る事ができる。古墳が破壊される時、１基だけ調査され、その記録が残っている。

宝米台地



第２図　宝米古墳群分布図及び宝米６号墳石室実測図（杉山付図）

43. 新井白幡神社

宝米台地の東端に、ひときわこんもりした杜があり、その中に古びた社が鎮座している。神社名は白幡神社と呼ばれ、八幡神を祀り、手前に拝殿、奥に本殿が建てられている。本殿は流造であるが、妻が無い寄せ棟の様になった変わった造りである。八幡神は清和源氏の氏神で、清和源氏は白旗を用いた事から、この神社の名となったのであろう。

新井白幡神社

44. 宝米遺跡発掘地

ここは平成21年、周辺地域の農業用水確保のため、栗山川から汲上げるポンプ場建設のため、事前に発掘調査された所である。この場所は宝米台地の北端に当たり、その眼下には篠本・新井から多古の田圃が一望でき、その中に栗山川の流れをたどる事ができる。この見晴らしの良い所で、発掘調査によって出てきたのは、今から1万年以上前の旧石器時代の石器である。当時の旧石器人も、ここから栗山川を眺めて生活していたのだろうか。

発掘地から眺める栗山川低地

45. 新井浅間神社

宝米台地北端から西縁を戻ると、鬱蒼とした木立の中に社が見える。浅間塚ほどではないが、少し小高くなっているので、もしかすると古墳の上かもしれない。木立を払えば遠く西に富士山が、ここから見えるかもしれない。町内には浅間神社がいくつもあり、富士信仰が盛んであったときもあったのであろう。

木立の中の新井浅間神社

46. 新井稲荷神社

浅間神社から西へ下りると、道の脇に鳥居が立つ。これが新井船戸谷稲荷神社で、鳥居の右脇には珍しい稲荷大明神の石像が、左側には巡拝記念碑と道標が立っていて、ここが元々の街道筋であった事を示している。稲荷大明神像は江戸宝暦2(1765)年の紀年銘があり、江戸中期にはこの稲荷神社があったのであろう。

新井船戸谷稲荷神社

48. 新井観音堂

稲荷神社から台地の下の道を北へ廻ると県道に出、東へ向かって再び右に曲がると新井の集落の中に入る。新井の集落の道は細く曲がりくねり、昔ながらの風情を残す。その中に朽ちかけた小さなお堂が道の脇にある。地元では観音堂と呼ばれているが、個人所有のもので、本尊は如意輪観音を祀っていて、お堂の中には木造如意輪観音座像、それに幕末と明治の十九夜講額絵が2点あった。現在は町に寄贈され、文化財収蔵庫に保管されている。

新井集落の中の観音堂

木造如意輪観音座像

慶応三年名の十九夜講奉納額絵

49. 新井路傍板碑

観音堂からさらに集落内を抜け、東へ行くと道脇に今度は板碑が立っている。これは室町時代に造られた供養塔で、中央より少し上に二つの梵字「キリーク」が刻まれた双式板碑で、他に紀年銘等は見られない。屋根が掛けられ、花を生ける花瓶などが置かれていて、今も近所の人々の信仰を得ているのであろう。

新井路傍の板碑

50. 新井の道標

板碑が立つ小道から東へ宝米に向かう町道に出、一筋北へ行くと十字路に当たり、左の消防庫のはす向かいに石の角柱が立っている。脊柱の北面には「山倉香取佐原道」南面には「八日市場旭銚子道」と刻まれ、ここが街道筋であった事が分かる。

新井の道標

51. 新井万福寺

道標前の県道を南へ行き、坂を上る手前を左に入るとお寺の山門が見え、それを潜ると新井万福寺の境内である。万福寺の堂塔はすでになく、集会所があるのみで山門のみがお寺であったことを示す。山門の左側には樹齢五百年は超えると思われる町指定天然記念物の椎の木の老樹が茂り、境内の南側は山が迫り、その裾に墓地があり、その中央には町内唯一の閻魔大王の石像が鎮座し、その後ろに層塔が立つ。この墓地前にはかつて町指定天然記念物の槙の木もあった。また県道に向かう墓参道の左側には屋根をかけた如意輪観音像を彫った十九夜塔があり、県道に出る右側には青面金剛像容と文字塔の庚申塔が立っている。県道を挟んだ西側には小堂を構えた子安観音や犬供養塔などが立ち、ここは町内でも様々な信仰の形がみられる面白いところでもある。

万福寺山門

町指定天然記念物の椎の木

枯死した槙の木

県道前の庚申塔

閻魔大王と層塔

十九夜塔

墓地前の地蔵

52. 新井東稲荷神社

万福寺の横を抜けこみちを東へ行くと、その正面に鳥居が見え、その山裾に稲荷神社の小さな社が鎮座している。社の前には狐が守っていてお稲荷様であることがすぐわかる。こちらは栗山川近くのお稲荷様より新しく建立された社かもしれない。

また、鳥居の西50mほどの山裾にも小祠があり、そこには稲荷大明神の石像が鎮座している。

新井東稲荷神社

53. 新井子安観音

万福寺墓地の県道をはさんだ向かい側に小堂や石塔が立ち並び、また墓石らしいものも立つ。小堂の中には赤ちゃんを抱いた子安観音の石像が鎮座し、きれいに清められていて、今も信仰されていることが察せられる。隣の小堂には読誦塔が立ち、その横には小さな文字塔があり、よく見ると犬狗供養の文字が見え、江戸時代の犬供養塔であることが分かり、当時犬を大事にしていた証拠である。

稲荷台明神石像

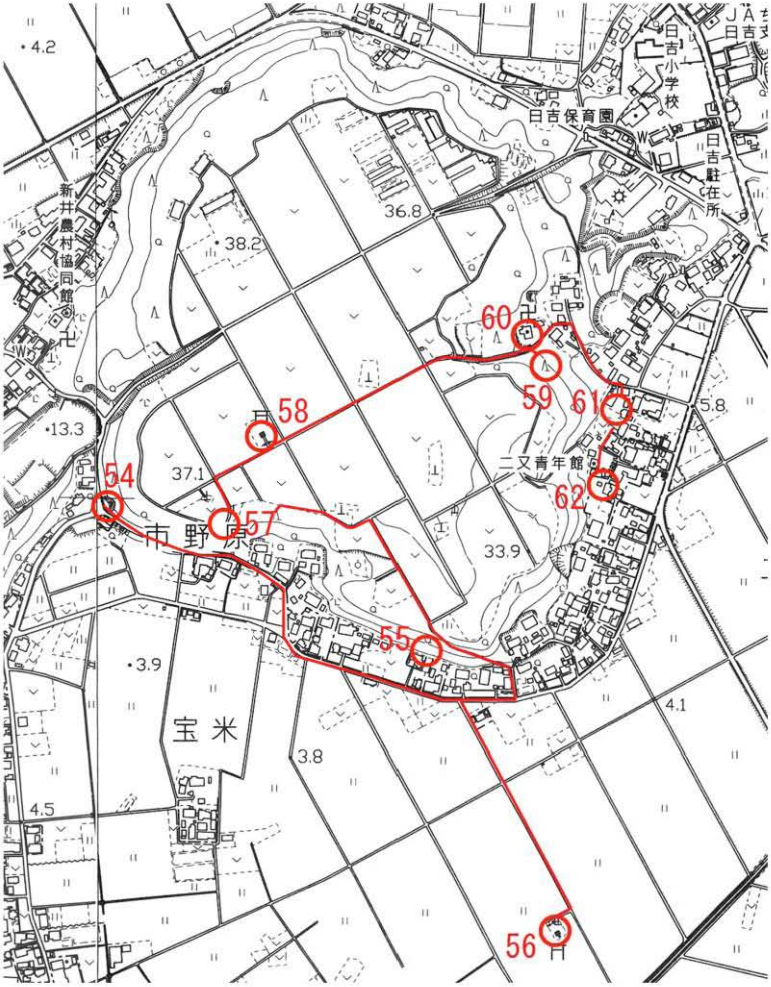
子安観音石像

犬狗供養塔

万福寺墓地向いの小堂(右が子安観音、左は読誦塔)

四　市野原から二又へ

市野原・二又台地は新井・宝米台地から続く下総下位面の平坦な台地で、集落は台地の南側にへばりつくように東西に長く伸びている。市野原集落の戸数は少なく、宝米集落と向かい合うように並び、檀家寺は宝米明光院で、どちらかというと宝米に寄りそっているようである。その東隣につながる二又とはどこで境になるか明確ではないが、何となく庚申塔があるあたりになる。二又の北部は少し谷津が入り、そこが集落の中心となり、お寺もそのあたりに集まっている。ここのお寺にはお墓が少なく、その代わり台地の上には多くの墓地が見られ、野辺の送りが昔から今日まで同じように続いているのであろう。



市野原・二又の台地の集落

54. 市野原庚申塔と道標

新井から市野原・宝米へ抜ける県道の切通しを越えると左側の辻に庚申塔と道標が立っている。ここで左へ曲がると市野原から二又へ行く道になり、右へ行くと宝米の集落へ抜ける道となる。その分岐点となるここに立つ庚申塔は、また宝米集落の入り口にもあたり、その集落の守り神でもあったのであろう。この庚申塔のすぐ南側には今日も現役の茅葺民家が建っている。

市野原辻の庚申塔と道標

55. 二又鴻ノ巣の庚申塔

県道から左に折れ、山裾の道を東に行き、工務店の前を来たところで山側に上がる小道があって、その先を見ると山裾に庚申塔が立っている。庚申塔は２基で、青面金剛の像容塔と文字塔が並び、像容塔の方は青面金剛の憤怒相などはよく残っていて見事である。なぜこんな山裾に庚申塔が立っているのか工務店の主人に聞いたところ、この庚申塔の前に昔は道が通っていたとのことである。こうした石仏を見ることによって、すでにすたれた古道を辿ることができるのである。

二又鴻ノ巣の庚申塔

56. 二又厳島神社

二又に入る所で南の水田の中を見ると、こんもりとした中に小さな社が確認できる。行ってみると厳島神社と扁額された神社で、江戸時代ぐらいからあったと思われる。なぜこんな水田の中に神社があるのかわからない。

田圃の中にある厳島神社

57. 市野原観音堂

二又の山裾の道が左へ大きく曲がる手前に、左へ入って坂を上がる小道があり、そこへ行って坂を登りつめ、平坦な台地を西へ行き、台地縁の墓地近くの茂みの中に入ると、小堂と石仏が多数立っている所がある。観音堂といっても地元では馬頭観音堂と言われ、その中央には馬頭観音像の石仏がある。また、斜面の近くには地蔵や手洗石などがあり、ここはもともとお寺であったことが分かる。小堂には石造如意輪観音や木造観音蔵が安置されていたが、現在は宝米明光院に保管されている。もう一つ地元の伝承では、この観音堂には摺墨桜とよばれた桜が植わっていたという。摺墨といえば鎌倉時代頼朝が有し、梶原景季に下賜された馬として有名で、その摺墨がここの桜の木につながれていたというので、これを摺墨桜とつけられたと言われる。もしかすると、この市野原の台地は鎌倉時代馬の放牧場であったのかもしれない。馬頭観音との関連も考えられる。

市野原観音堂境内

馬頭観音塔

石造如意輪観音像

木造観音像

58. 八雲神社

観音堂の北100mほどのところ畑の中に、木々に囲まれた八雲神社がある。八雲神社は出雲大社の摂社で、素戔嗚尊を祭神とする神社であるが、この地域では少なく珍しい神社である。また、集落からは隔てているが、観音堂とともに信仰されていたのか。

市野原八雲神社

59. 二又石祠群

八雲神社から台地上を東へ横断し、東の裾を下りていくと右側の古木の袂に石祠が鎮座する。文字の確認も難しく、札もないため何の神を祭っているかわからなくなり、杜の中に転がるように佇んでいるだけである。

二又の石祠

60. 二又三福寺

坂を下りていく途中の左側には、小奇麗であるが無住となった小さなお寺がある。本堂を覗くと本尊の不動明王が鎮座し、睨みを利かしている。二又にはもともと福の字を使った三つのお寺があり、その三つのお寺を統合したのがこの三福寺だと言われる。しかし、このお寺の下に、まだ長福寺というお寺のお堂と山門が遺り、信仰の深さの名残を有している。不動明王はこの地域に多く、やはり成田山新勝寺の不動明王の影響を受けた結果であろうか。長福寺には七観音と毘沙門天が安置され、それぞれのお寺で異なった仏様が信仰されていたのであろう。

二又三福寺

三福寺本尊の不動明王

三福寺前の板碑

61. 二又□福寺跡

三福寺から坂を下りて右の小道を入ると、左側に今はゲートボール場となっている広場がある。広場の周りには石仏や墓石が少し並んでいて、何かいわくありげな所である。ここも元はお寺があって□福寺と言われていたという。広場と小道との間の土手上には道に向かって庚申塔が立ち、その先の角には如意輪観音像を彫った墓塔が広場に向かって立っている。

最近までゲートボール場だった寺跡

庚申塔

墓塔

62. 二又長福寺

ゲートボール場の南隣には一段高くなった広場がまたあり、山側を背にして二又青年館が建ち、それと並ぶ様に古びたお堂が建っている。これが二又長福寺の名残のお堂で、その南向かいには朽ちかけた山門が遺っている。お堂には素朴な彫の七観音や厚化粧された毘沙門天が安置されているが、今はあまり拝まれていないようである。山門の内側両袖には中世の五輪塔や宝篋印塔が、また外側の両袖には六地蔵が並んでいて、元来中世以来の古刹でそれなりの格を有していたお寺であったことを示す。山門と並ぶ東側の広場入り口の脇には中世板碑が２基並んで立ち、右の方は飯岡石に五輪塔を線刻した町内唯一の五輪塔板碑である。左は梵字を彫った種子板碑で

長福寺本堂

長福寺山門

ある。広場を出てすぐ右手には梯子や木柱を収納している所があり、ここにある梯子はここの地区で過去に行われていた梯子獅子舞に使われていたのもだという。ここでも昔は梯子獅子が舞われていた一つの遺物のである。

道標と板碑２基

山門内の中世石塔

山門脇の六地蔵

この中に梯子が収納されている

木造七観音像

木造如来像

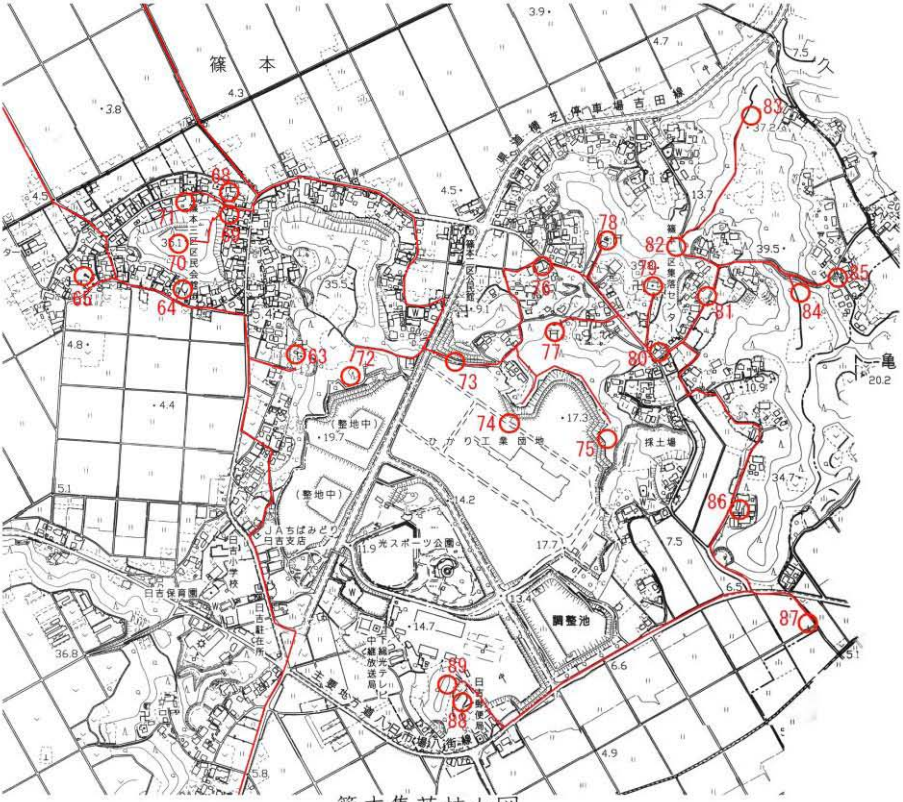
木造毘沙門天像

五　篠本

篠本は横芝光町で最も北に当たる所で、北を匝瑳市や多古町に接し、周りを栗山川低地に囲まれ、台地の部分は少なく、なおかつ浸食が進んでいて台地上の平坦部が狭隘な下総上位面であって、畑地が極めて少ない所である。しかし、その地形を利用して中世には城郭が各地に造られ、地理的な位置から要衝となっていた。現在は地区の中央部が工業団地となってしまったが、ここにはこの地域を治めた領主の城跡があり、その周りには配下の屋敷が立ち並ぶ村落があったことが発掘調査によって明らかとなった。発掘調査では中世城郭以外に旧石器時代から縄文、弥生、古墳、奈良、平安と各時代の遺構・遺物が出土し、さらに江戸時代の民家跡もあった。この様に歴史のある地域であることが発掘調査でもわかり、今日も存在する新善光寺、寒風城跡など歴史遺産も含め、北辺であるが重要な所である。

篠本広域図

篠本地区の空中写真



篠本集落拡大図

63. 篠本三行寺

二又十字路を北へ渡り、すぐ左に入る道がある。これは県道の旧道で、篠本三区へ行く道である。左に日吉小学校、右に旧農協を過ぎ少し北へ行くと、右手の少し高くなった所に赤い建物がみえてくる。それが篠本三行寺の本堂である。三行寺は最近立て直されたお寺で、本堂はきれいであるが、現在は無住となっている。

三行寺本堂

三行寺前のお地蔵様

64. 篠本三区区民会館前

三行寺から県道に戻り、北へ向かうと県道の両側に山が迫る手前を左に入り、少し行くと右側に篠本三区区民会館という小奇麗な建物が建ち、前にはお地蔵様が立ち、すぐ近くの池脇には弁天様を祀った石祠がある。会館の西側は墓地があって、ここにも小さなお寺があったのかもしれない。

篠本三区区民会館

池脇の弁天様を祀った石祠

65. 篠本熊野神社

区民会館からさらに西へ行くと右側に鳥居と拝殿が立ち、その後ろに少し小高い山があって、頂に神社の本殿が鎮座している。一間社流造のさほど大きくない本殿であるが、脇の飾りの彫刻は見事である。江戸時代の作と思われる。この辺りは船戸と呼ばれ、昔は栗山川水運の船着き場があったのかもしれない。熊野神社は九十九里平野に点々として分布し、そういう水運と関係があったと思われる。

熊野神社正面

熊野神社本殿

境内子安神社

本殿脇障子の彫刻

拝殿裏にある和船

66. 栗山川篠本堰

熊野神社の手前を右に入り、集落を抜けて栗山川へ向かう。栗山川の土手に上がると直ぐ北に堰の構築物があり、これが篠本堰である。栗山川は両総用水の導水路ともなっていて、所々に堰を設け、稲の田植え時ともなると堰を閉めて水を水田へと流すのである。栗山川の堰は河川改修に伴って改築が進められ、この堰は古い方になっている。また、この堰を渡って多古町島に行くことができ、かつては篠本と島とを行き来する筋にもなっていたらしい。

篠本堰

67. 篠本湿原

篠本堰から北の栗山川左岸には開墾されていない湿原地帯が広がり、自然の湿原植物の宝庫となっている。この湿原を地元では大蒲と呼び、葭や蒲が繁茂し、かつてはここの葭を取って葭津を作ったりもした。この湿原には初夏は野花菖蒲、水千鳥、夏は小鬼百合、秋は沢桔梗と、どちらかというと高層湿原に生える花が咲き、低地でなぜあるのか不思議である。もしかして氷河時代の生き残りかもしれない貴重な植生で、できる限り保護したい。

篠本湿原遠景

春、芽出しの湿原

野花菖蒲

水千鳥

沢桔梗

大葦切の巣

68. 篠本弘経寺(ぐぎょうじ)

篠本湿原からまた篠本三区の北側に戻り、ちょっと集落の中に入ると右側に真新しいお寺が建っている。お寺の名前を弘経寺と呼び、町で唯一の日蓮宗寺院である。東隣の匝瑳市や北隣の多古町には日蓮宗寺院が多いのに対し、本町にはこの寺のみである。このお寺には日蓮宗であるためか、妙見菩薩像と七面大明神像が安置されている。もともとお寺のすぐ前の山の上の小堂に置かれていたのもを、お堂が傷んだため同寺に移したという。妙見菩薩(大明神)は北極星の化身で日蓮宗と結びつき千葉氏の守護神となって、県内にはこの仏様を祀ったお寺や神社が多い。七面大明神は七面天女とも言われ、日蓮宗総本山久遠寺の背後にある七面山に住む大蛇(龍神)が天女に化身し、同寺の守り神になったという。弘経寺には埴谷妙宣寺から移されたという枝垂れ桜が植えられ、春には淡い桜色の花が咲く。

弘経寺正面

妙見菩薩

七面大明神

69. 篠本三区の参り墓

弘経寺の向いに共同墓地がある。狭い敷地の中に10以上の区画に分かれ、今でこそ火葬にして骨壺を埋葬することができるが、かつては土葬であった事からここに埋葬することはできなかったと思われる。それを解消した方法がここを参り墓とし、山の上に埋め墓を設けるという両墓制が採用された。昔は埋葬を野辺の送りと言い、集落から外れた野山の墓地に死者を葬った。しかし、いつも死者を偲ぶのに山の上にお参りするのが大変なため、集落の中にお参りする為にお墓を設けたのが参り墓である。こうした両墓制のお墓は各地に見られ、ここもその一例である。

篠本三区の参り墓

70. 篠本要害台城跡

弘経寺前の墓地の脇から山の上に上がる道があり、ここからが現在城跡の上に上がる唯一の道である。要害台城跡は栗山川低地に突き出した三角形の独立丘に造られた中世の城跡で、頂上の平坦部の南側に主郭を配置し、東側にひな壇状の曲輪を作り、その中央に城戸口を設けているが、現在そこは通れない。城の構造としては複雑ではなく、発掘していないので時期については不明であるが、東の篠本城を本城と考えると、要害台城は栗山川を見張る出城であったかもしれない。

篠本要害台城跡遠景

71. 篠本三区薬師堂

弘経寺からさらに20m程西の左側の民家と民家の間に細い道があり、その奥に小堂が建っている。小堂の中には像高30cmほどの木造薬師如来坐像が安置され、手前にはもうほとんど面相も分からなくなった片足立ちの蔵王権現像が置かれている。この小堂は昭和46年の大雨の時、裏山が崩れ埋まったのを、近隣の人々が探し出し、堂を再建し安置したのだという。また、堂の後ろには角の取れた板碑と五輪塔とが置かれ、裏山が城跡であることと関連があるかもしれない。

細い路地の先の薬師堂

薬師如来と蔵王権現

裏の板碑

73. 篠本夏台遺跡

篠本三区から旧道を東へ進み、山すそに沿って南へ向かい、新道に一旦出て山へ上がる道を登ると、夏台の上へ出る。夏台には古墳時代の遺跡があり、平成７年の発掘調査では、古墳の跡や住居跡が出土し、勾玉や切小玉などの副葬品も出土した。この遺跡からは古墳の跡が３基発見されたが、いずれも墳丘が無いだけでなく、石室も痕跡はあったが、どれも石室の石材は抜き取られていて、破片のみが出土した。これは多分中世において、板碑を造るための石材として取られた可能性が大きい。この下総東部地域の古墳の多くが、石室に黒雲母片岩を使っていて、それが仇となって、板碑の格好の石材となった所以である。それが下総型板碑の成立の元でもある。

夏台遺跡空中写真

夏台１号墳（手前に横穴式石室があった）

夏台３号墳

３号墳石室跡

出土した切子玉と勾玉

また、遺跡の南部には小高い塚があり、発掘で江戸時代の瓦質土器が出土し、江戸時代の浅間塚であることが分り、冬にはここから富士山を拝むことができた。

調査中の浅間塚

73. 篠本新台遺跡

夏台から新道を渡ると自動車の整備センターがある。そこにはかつて新台遺跡と言う縄文から中世の遺跡があり、平成８年の発掘調査によって、多くの遺構、遺物が出土した。ここからは縄文前期の住居跡や土器、奈良時代では「寺」銘墨書土器、平安時代では瓦塔が出土した。そして中世では篠本城跡本城の西側に当たり、室町中期の建物跡や地下式坑など多数の遺構が出土した。また、同時代の和鏡が３面と懐中鏡２面がまとまって出土したり、抹茶入れが出土し、遺跡としては格のある所であることが推定された。中世における本遺跡は、篠本城本城の支郭と思われ、遺構は出土した遺物からほとんどが 15 世紀後半で、本城の後期から終末期に当たり、篠本城の拡大によって営まれた二の曲輪的存在であったろう。ちなみに本遺跡の最も大きい建物跡に立つと、北に志摩城跡をはじめとする多古方面が一望できる。

新台遺跡全容

縄文前期の住居跡

縄文前期後半の土器

［古寺」銘墨書土器

瓦塔

新台遺跡で最大の中世建物跡

中心部の中世遺構

新台遺跡から出土した中世和鏡

志土呂製茶入

近世初期の鉄鍋

74. 篠本城跡(城山遺跡)

新台遺跡の東側は篠本城跡の本城、城山があった。城山は標高36mのほぼ平坦で、東西150m、南北200mの菱形に近い形の台地で、北に台地の付け根があり、この形をうまく利用して城が造られている。台地の中央部に主殿の建物跡があり、これを囲むように堀が走って区画(曲輪)を造り、各曲輪には建物跡や地下式坑が密集し、全体が集落の様になっている。菱形の台地の各角には見張り台が設けられ、台地斜面にも堀が廻っていて、台地上の防御も固くなっている。また、谷津の奥の斜面部も平場整地して曲輪が造られ、建物跡や地下式坑などがある。遺物も多く出土し、陶磁器では13世紀代から15世紀末までの、中国製青磁、白磁から古瀬戸、常滑、渥美などのほか、かわらけや内耳土鍋などの土器、石鉢、茶臼、砥石、燧石などの生活用品、切羽、笄、鋲、八幡座金具、目貫などの武装具、和鏡や紅皿、鉄漿壺などの化粧道具、板碑や五輪塔などの宗教遺物、当時の残されたほとんど物が出土した。建物跡の周囲からは屋敷墓が検出され、馬の埋葬も多かった。このように篠本城跡は戦いのための城と言うより、生活の場とした所を防御した集落型城郭と言えよう。

中世のほか城山からは、縄文，弥生、古墳、奈良、平安各期の遺構や遺物が出土し、長くここが利用されてきたことが分かった。殊に縄文時代では他にあまり類例のない早期の土器が多量に出土し、この時期の多様さを改めて示すこととなった。

篠本城跡空中写真

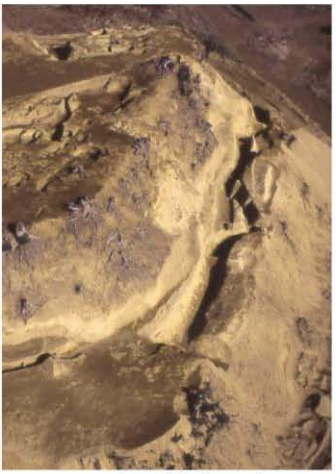
中央部の堀と建物跡群

西端部の堀と建物跡群

東側斜面下の水場

北西部の墓域

主殿と思われる建物跡



東側斜面の堀

埋納された古瀬戸瓶と青磁碗

出土した中世陶磁器

金銅製刀装具等

和鏡

中国製銭貨

茶臼

燧金と燧石

板碑

城山東斜面の縄文早期(花輪台式)土器出土状況

花輪台式土器

花輪台式土器底部

縄文草創期石器・土器

縄文晩期の土器

その他の縄文早期土器

弥生土器

城山１号墳

城山１号墳周溝出土の須恵器

城山１号埋葬施設

城山１号埋葬施設から
出土した副葬品

古墳時代中期の城山18号住居跡

城山18号住居跡出土の土器

平安時代の城山１号住居跡

城山１号住居跡から出土した遺物

75. 神山谷遺跡

城山台地の東側に南北に細長く延びた台地が神山谷と呼ばれ、台地上から斜面部にかけて縄文時代から近世までの遺構が多数検出された。また遺物では旧石器時代まで遡る石器も出土し、細長い丘陵状の地形でありながら濃密な遺跡であった。

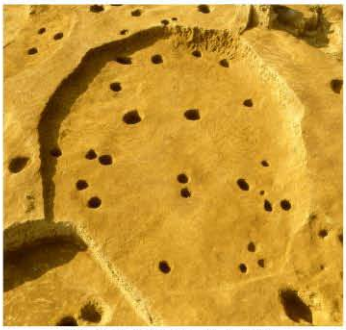
縄文時代では、早期の住居跡や炉穴、落し穴が台地先端部に分布し、弥生時代の住居跡が台地全体に散在するが、古墳時代に成ると住居跡が急に増え、台地全体が隙間のないほどに成る。これは城山の方が広いのに対して古代遺構が少ないのと対称的で、古代人の居住立地の決め方が

神山谷遺跡北側から

神山谷遺跡南側から

単純でなかったことを示している。

縄文早期では径３ｍを越える巨大な落し穴が掘られ、何を追い込んだか考えさせる。早期末の土器は出ているが、前期前葉の土器は見られない。前期では中葉の住居跡が数軒あり、黒浜式の土器が出土する。後葉になると土器(諸磯式・浮島式)は多いが、遺構は無くなる。その中に獣面の把手のある土器がある。中期になると土器は少なくなり、これ以降の縄文遺物は無くなる。


縄文早期の住居跡

縄文早期の炉穴

縄文早期の巨大な落し穴

縄文早期の刃部磨製石斧

縄文早期末の土器

縄文前期中葉の住居跡

縄文前期中葉の土器

縄文前期末の土器

獣面把手のある土器

弥生時代では中期後葉から後期にかけての住居跡７軒が出ている。遺物は少ないが、少ない土器を見ると、中期では南関東系の宮ノ台式であるのに対し、後期になると北関東系の土器に代わっている。

弥生時代の住居跡

弥生時代の土器

古墳時代中期の住居跡

古墳時代中期北陸系の土器

古墳から平安時代まで重なる住居跡

古墳時代では前期から後期まで住居跡があり、中には上の写真の様な北陸系の土器も入っている。

奈良時代には中南部の台地上西側斜面に、大量の土器廃棄跡が検出された。同時代の住居跡は決して多いとは言えず、なぜここに大量の土器が捨てられたか謎である。

平安時代では住居跡が小さくなる傾向であるが、遺跡全体に分布する。南部の住居跡からは、皇朝十二銭の内の富寿神寶が、北部11世紀住居跡からは、玉製帯飾が出土し、また、右写真の様に墨書土器も多く出土し、格の高い遺跡であることを示めした。

平安時代の墨書土器

中世になると最北部の台地上に堀で囲んだ曲輪がある他は、斜面部の比較的緩やかな城山に向く所を選んで段整地して、曲輪を造る様になる。最北部の曲輪は、西と南側に連続堀底仕切のある堀が周り、特に防御を高めている。他の斜面部曲輪は、段整地したのみで狭いながらも屋敷地とし、建物や地下式坑などが構えられている。また近世も中世遺構を削って屋敷が造られ、今日の集落形態に近くなっている。

神山谷最北の曲輪

神山谷北部

また近世も中世遺構を削って屋敷が造られ、今日の集落形態に近くなっている。ここでは斜面に横穴を掘って、横井戸を造っていて、楽な水確保を行っている。近世では建物跡の柱穴が小さいか少なくなって、掘立柱から礎石立ちの柱へと代わったのであろう。近世陶磁器は瀬戸の他、肥前染付けや京・信楽系などさまざまな物がある。

神山谷斜面部の曲輪

近世屋敷跡

近世陶磁器

76. 篠本二区庚申塔

現在のひかり工業団地北端の東へ入る道を行き、民家が両側にあるところが大門と言われ、中世篠本城跡への入り口である。そこを過ぎて突き当たりを左に曲がり、開けた所に出ると篠本から八日市場へ行く旧道に当たる。その旧道の角に小さな庚申塔が立っている。鎧のようなものをまとった青面金剛の容像が彫ってあり、篠本一区への入り口の守り神であろう。

篠本二区の庚申塔

77. 篠本日吉神社

庚申塔から東へ切通しのような旧道を東へ少し登ると、左側に長い石段があり、上に鳥居が立っている。ここが篠本日吉神社で、篠本の村社である。篠本は二又、新井、宝米とを合わせて明治時代から戦後まもなくまで日吉村と呼ばれ、その謂れがこの日吉神社にあるほどである。それだけかつては大きな力を有していた神社であったろうが、今日は山の上にひっそりと佇んでいるだけである。長い石段を登ると境内には拝殿(神楽殿)前に建ち、その後に流造りの本殿が建っている。かつてはこの拝殿で獅子舞の神楽が奉納されていたと言う。日吉神社は元来天台寺院の守護神として建てられることが多く、神社の東にある新善光寺はもと天台宗であったと思われる。おそらく江戸時代以前はお寺と共に、栄えた村の鎮守であったろう。

日吉神社正面

78. 篠本子安神社

日吉神社から旧道をさらに東に行くと、右に入る小道の先に石段があり、その上の向こうに鳥居が見え、小さな社が建っている。これが篠本子安神社で、今も地区の女性たちから安産の神様として信仰され、正月には年に1度の子安講が、近所の集会所で営まれると言う。変わっているのはこの子安講の時、神社に奉

篠本子安神社

納されているお面が出され、講に集まった人々に披露されとのことである。まだそのお面を見ていないので、どのようなものかは分らない。

この子安神社の裏に行く道が続いていて、そこを行くと突き当たりに多くの石祠が並んでいる。石祠には様々な銘が彫られているが、皆江戸時代のものである。

子安神社裏の石祠群

79. 篠本新善光寺

さらに旧道を東へ行き、少し開けた所に左に入る道があり、その先の山の中腹に大きな堂宇と大樹が見える。これが篠本新善光寺と呼ばれる、この地域ではもっとも大きい寺院である。このお寺の縁起は古く、承平五(935)年勃発の平将門乱の時、これを鎮めるため、京の高僧寛朝が高雄山神護寺の不動明王像を奉じて関東に下った際、九十九里尾垂浜から成田へ行く途中で、一旦この新善光寺にとどまったと言う。そのためか新善光寺の本尊は不動明王である。しかし、同寺には別に善光寺式阿弥陀三尊像が本尊としてあり、これが現在の寺名の由来となっている。善光寺式阿弥陀三尊像は、善光寺信仰が流行った鎌倉時代の仏像で、その時に寺の名称が変わり、同時に宗派も変わったのかもしれない。

篠本新善光寺本堂

銅造善光寺式阿弥陀三尊像

本尊の不動明王座像

新善光寺本堂の前には、幹周り6mはある大きな榧の木が植えられている。樹齢にして500年以上は経つかと思われ、樹高は20mくらいで、枝は周囲10mずつ広げている。榧の木は雌雄別株で、この木は雌株でかつては秋になると多くの実を実らせていたが、今は樹勢が衰えたせいかあまり実をつけなくなった。かつてはこの栢の実は、先端に穴が開き、縁起物と言われていた。

新善光寺前の大榧の木

篠本一区中央の秋山商店

80. 篠本秋山商店

篠本一区を横断する旧道と北から来る道が出会った辻に、昭和初期風の秋山商店がある。篠本一区の中央部に当たり、何でも売っているいわゆる雑貨屋さんであろうが、今で言えばコンビにかスーパーマーケットであろう。昔はこういうお店が各集落にあったものである。

81. 篠本一区題目塔

秋山商店の辻を曲がり、北へ行くと集会所の先の左側に、文字を彫った石塔が立っている。文字は筆先を伸ばしたように、「南無妙法蓮華経」と彫ってあり、日蓮宗の題目塔であることが分る。日蓮宗では仏像の容像を拝むことは無く、法華経の「南無妙法蓮華経」唯一本尊として拝むところから、石塔も容像塔は建てず、このような題目塔を建てたのであろう。

篠本一区の題目塔

寒風城跡入口の石祠

82. 寒風城跡入口の石祠

北へ行く道を進むと二又に別れ、そこを左へ坂道を登り、上りきった所に右に入る小道があり、その反対側の土手上に石祠がある。

83. 篠本寒風城跡

右の小道を上がると、台地を切るように堀があり、その上には土塁が見える。ここからが篠本寒風城跡である。寒風城跡は篠本台地が北に張り出した所を利用し、その先端から南へ300mほどの範囲に城域を展開させた城で、今日も堀跡、土塁がよく残っている。そこが篠本城跡と異なる所で、篠本城跡より後に築かれた城で、寒風が吹きすさぶ北に突き出した台地に造られた事から寒風城と名づけられたのであろう。伝承では篠本城が廃城後の16世紀はじめ、飯倉の椎名神九郎が篠本に入って、寒風城を築城したとされる。その後天正十八(1590)年豊臣秀吉の小田原攻めのとき開城、廃城になってそのまま現在に至る。

北から見た寒風城跡

84. 神山台の切通し

寒風城跡から元の道を戻り、篠本一区集会所の前の道の丁字路を東へ、急坂を上がりきると神山台の切通しになる。この切通しの左側は寒風城跡の堀と土塁があり、ここが同城の南端になる。そして切通しの右側に小道があって、そこをまた上がると神山台遺跡のある台地に出る。また、上がりきったすぐ左側には低い土盛りがあり、これは地元で伝えられる十三塚である。現在は切通しの北側に1基と南側に2基が残るのみであるが、さらに神山台の南へあったと思われる。十三塚は江戸時代に造られた供養塚の一種で、ここの塚でも発掘調査で周りの溝から宝永火山灰が検出され、江戸中期にあったことが確認された。平成8年の発掘では、弥生時代の住居跡や中世の火葬坑が検出された。

神山台切り通しの発掘調査

神山台遺跡で採集された
角柱状鑿形石斧

神山台の十三塚のひとつ

85. 篠本鍛冶屋谷の庚申塔、十九夜塔

篠本神山台の切通しを過ぎて坂を下りると篠本鍛冶屋谷の集落がある。このすぐ東側は匝瑳市の亀崎で、町境の集落である。坂を下りたすぐ右側に墓地があり、その墓地を臨むように山側に如意輪観音を彫った十九夜塔が鎮座する。また、道の左側の山裾には庚申塔が立っている。この庚申塔は篠本への入り口にある、守り神としての存在であろう。

鍛冶屋谷の庚申塔と十九夜塔

86. 篠緑の蔵元青柳酒造

鍛冶屋谷から再び元の道を戻り、篠本一区中心部から東へ山裾の道を東へ行くと庄屋のような屋敷が見え、篠緑の蔵元青柳酒造がある。青柳酒造は町内で唯一の酒造家で、篠本の湧き水を利用し、地域の米で醸造した酒は地元で根強い人気があった。蔵には酒米を蒸した煙突立ち、その前には大きな醸造タンクがおかれ、往時の名残を残している。しかし、今日は自前での酒の醸造ができなくなったが、現当主が細腕ながら蔵の名を守っている。

青柳酒造蔵元

87. 篠本田んぼの中の石仏群

青柳酒造蔵元から南へ出て、県道を渡り南へ行く田んぼの中の道がある。その途中に道の両側に石仏が並んでいる。右側には十九夜塔　基と地蔵、左側にも十九夜塔と地蔵が立っている。なぜこんな田んぼの中に石仏が立っているか不思議であったが、この道の先を川を渡って行くと、山の突き当たりに道標が立っていて、この道がかつての街道であったことが分った。つまり、街道筋の村境に、石仏を多く建てたということである。

八日市場へ行く道の両側にある石仏群

88. 篠本八石田遺跡

県道を西へ行き、右手のひかり工業団地を過ぎると、日吉郵便局が見えてきた所でその背後に段々畑を見ることができる。今あるこの段々畑の東側にもかつては同様な斜面が続いていて、ここが八石田遺跡と言われ、工業団地造成時に発掘が行われ、平安時代の住居跡や中世の屋敷跡などが発見された。ここでも篠本城跡と同じ時代の中世の遺構があったと言うことは、篠本城の範囲がここまで広がっていたと理解していいだろう。

日吉郵便局と八石田

発掘調査中の八石田遺跡

重なって検出された平安時代住居跡

89. 篠本大六天

八石田の段々畑のさらに上にこんもりとした森が僅かに残り、その中に入ると北側に向いて開口した平場があり、その中央に石塔が立っている。石碑には「大六天」と彫られ、ここに元々は大六天を祀った社があったのかもしれない。しかし、この山も何か特別な雰囲気を持った場所である。

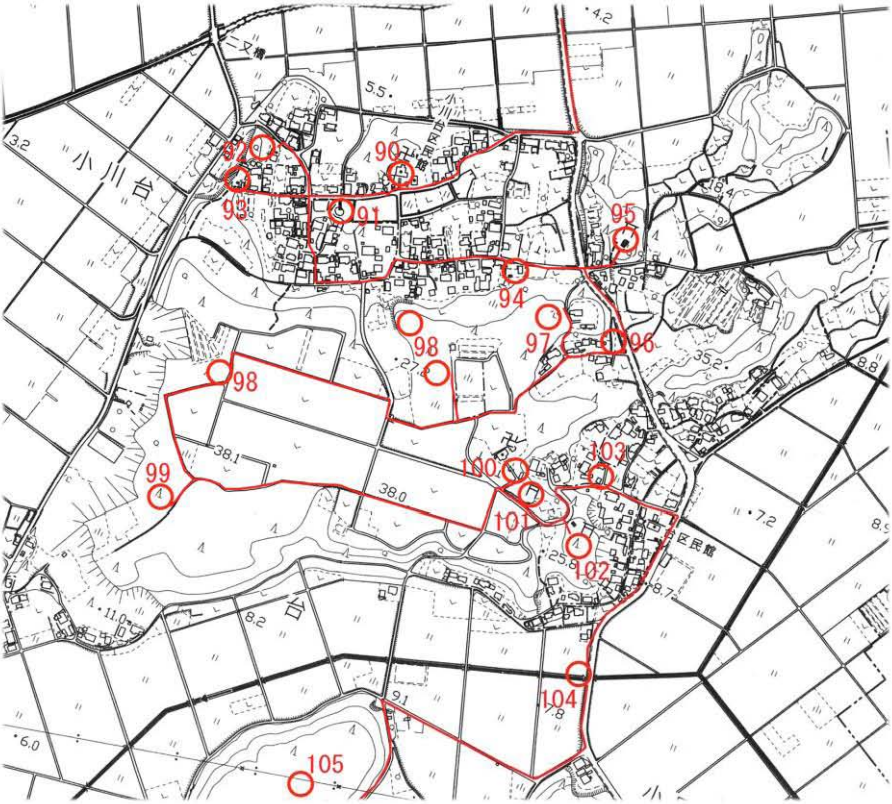
大六天石柱のある平場

大六天石柱

六．小川台・台

篠本日吉郵便局前の向いに南へ水田の中を行く道が真直ぐ延び、その先の少し高くなった所に展開する集落が小川台である。ここは水田からわずか5mほど高くなった千葉段丘上に形成された集落で、戸数約50で町内でも大きい方である。その南側にまた一段高くなった平坦な台地があり、これを越えると台の集落に入る。今は農免道路で繋がり、行き来しやすくなっているが、昔は山越えして結んでいたという。ここの古い地名は岩室と呼ばれ、その名残が小川台の隆台寺の山号が岩室山、山の最も高い所に岩室砦跡があり、ここに古代岩室郷があったと言われる。台地の上には小川台古墳群があり、古墳の石室からこの名がついたか。

北から遠望した小川台



90. 小川台隆台寺

篠本日吉郵便局前から農免道路を南へ真直ぐ行き、台地に突き当たった所を右に曲がり、台地に上がってしばらくいくと右側に山門と火の見櫓がある。ここが小川台隆台寺と呼ばれる古刹で、山門の脇には中世の板碑が立っている。山門を潜った正面には本堂があり、左側には方三間堂が２宇並んで立っていて、右が阿弥陀堂、左の一回り小さいのが不動堂である。阿弥陀堂には阿弥陀如来が、不動堂には不動明王が安置されていたが、今は無く、本堂に善光寺式阿弥陀三尊像が本尊として安置されている。隆台寺は以前新善光寺とも言われていたことがあり、善光寺式阿弥陀三尊像を本尊としていたためであるが、また不動明王をも主尊としたこともあり、篠本の新善光寺と同じような経歴を辿っていると思われる。お寺の裏は少し高くなり、周りに少し高い土塁のような高まりがあり、中世居館があったと推定される。

隆台寺門前

不動堂と阿弥陀堂

善光寺式阿弥陀三尊像

門前脇の板碑

十九夜塔

門前脇の無縁仏塔

91. 小川台弁天池

隆台寺の斜向には池があって、その中に島があり弁天様が祀られている。池は今は周りが四角く固められているが、かつてはおそらく隆台寺の前を横たわるように広がっていたかもしれない。そう想像すると隆台寺は、鎌倉時代には浄土式の伽藍であったかもしれない。

小川台の弁天池

92. 小川台薬師堂

隆台寺前の道を西へ行き、突き当たりを右曲がって台地を降りる手前の左側に少しあがる所がある。そこをあがると正面に小さく新しい御堂があり、中に石の薬師如来像が安置されている。御堂の左側には墓石が並び、小さな共同墓地が造られていて、そのお堂に近い所に中世の板碑が１基立っている。ここにも中世の痕跡が色濃く残っている。

小川台西端の薬師堂

薬師堂横に立つ板碑

93. 子安大明神

薬師堂からまた道を戻って、隆台寺前の道と交差する所を右に曲がり、小道を西に行くと、少し上り坂をまた右曲がると鳥居が立ち、その先に小さな祠を構えた神社がある。鳥居には子安大明神と書かれた扁額が掛けられ、子安様を祀った神社である。その奥の石祠は妙見尊と彫られた石祠があり、小川台集落の西側を守る神であるのだろう。各集落には大抵子安様を祀り、安産祈願の祀所となっている。

小川台西端の山中にある子安大明神

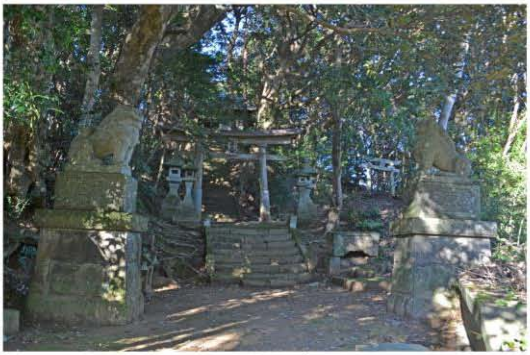
94. 子安観音とお地蔵様

子安大明神から元の道に戻って、集落の中の道を山側の方を廻って東へ行き、集落のはずれの右側の覆い屋の中に、子安観音とお地蔵様の像を彫った石塔が鎮座している。屋根がかかっているが、子安観音の方は表面が苔むしていて像容が分りにくくなっていて、古さが感じられる。小川台の西端には子安大明神が祀られ、東には子安観音が鎮座し、子供の安産にはやはりなみなみならぬ、思いがあったのだろう。

石造子安観音とお地蔵様

95. 小川台大国神社

子安塔からさらに東へ行くとすぐ農免道路に出、それを越えるとすぐ左側に鳥居があり、その上に小山がそびえ、急な石段を上がると頂上に社殿が建っている。この山は地形図で見ると角錐状でピラミッドの様であり、小川台の東端にあって大国主命神を祀っていることから、奈良の大神神社を勧進し、この山は三輪山を模したと思われる。つまりこの大国神社は小川台の東の守りである。また、この山の西側の中腹には龍神を祀った所があり、この山の北には龍神池がかつてあったという。大国神社の祭神は大国主命、あるいは大物主命、または大巳命で、蛇の化身であり、縄文の神の一柱であった。つまり岩室郷である小川台は古くから人々が営んだ所で、その遺跡が今も息づいているのである。



大国神社参道

謎の木鐘（魚）？

龍神を祀った小祠

96. 小川台寺方遺跡

大国神社から農免道路を少し南へ下る両側に、小川台寺方遺跡が広がる。農免道路は大国神社前の所で峠になり、そこから南へはくだりになり、その右側の高い所が岩室砦があり、農免道路の整備による平成6年の発掘調査ではその堀の一部が検出された。また同調査では古墳時代後期の住居跡も検出され、台地上の古墳の存在とも繋がるものであろう。

調査中の寺方遺跡

発掘された堀跡

発掘された古墳時代の住居跡

97. 小川台岩室砦跡

農免道路の寺方から右に入る小道があって、そこを上がり、さらに右に入る道を上がり切った左側に岩室砦跡の主郭がある。岩室砦跡はこの左側に土塁で囲まれた主郭と、道の右側二郭とからなるこじんまりとした構えであるが、今もよく残っている城跡である。この城跡に関しては、千葉庶流匝瑳椎名党の一族、岩室資胤・直種・胤長らが在城したとの記録が残る。この城跡のいま地表に見られる遺構は、土塁や堀が見られ、また、平成6年の寺方遺跡の発掘調査で出土した遺物から、15世紀から16世紀末まで存続したと思われる。

岩室砦跡の航空写真

岩室砦跡に残る土塁

98. 小川台古墳群

岩室砦跡から台地の上へ上がると、今は平らな台地に畑が広がっているが、かつては山林の中に土饅頭が点々と分布していた。この土饅頭は古墳時代のお墓で、小川台古墳群と呼ばれる。昭和50年代、この台地を開墾し畑にする際に、障害となる古墳が発掘され、その内の5号墳からは様々な形象埴輪が出土し注目された。特に武人や貴人、馬のほか、鹿埴輪は全国的に珍しい角付きであった。ほかに鉄製直刀や鉄剣などの副葬品も出土し、この地域の古墳文化の一端が明らかとなった。現在18基中6基が残るのみであるが、今なおここに古墳群があったことを示している。

小川台15号墳(前方後円墳)

小川台16号墳(円墳)

発掘前の5号墳(前方後円墳)

5号墳の発掘で出土した埴輪

5号墳出土の埴輪

4号墳出土の
須恵器長頸瓶

5号墳出土の直刀

1号墳出土の鉄製品

99. 宥照法印入定塚

台地西端にある6号墳から南へ台地の縁の道を行き、山林の中に少し入るとちょっと変わった五輪塔が立っている。これが宥照法印の入定塚である。宥照法印は江戸時代中期のお坊さんで、宝米宝蔵寺の住職であった時、周辺の民が享楽に耽り生活の質実を疎かにしていたのを嘆き、自身が入定してこれを戒めようとした。周辺の民はこれを知って師の志を汲み、師を供養するために建てたのがこの五輪塔である。この五輪塔は笠形の火輪が台形の様になっていて高さがあり、一番下の四角い地輪も高さがあって、塔全体で身高になった、変わった形をしている。

山林の中に佇む宥照法印入定塚

100. 台宗龍寺

宥照法印入定塚から畑の中を東に行き、台地の東端に来ると大きな樹の元にまだ真新しい本堂が建つお寺がある。このお寺は光では唯一の禅宗寺院で、宗龍寺と言う。お寺の前の右側にはきれいに御影石の台座に載せられた中世の板碑が３基立ち、入り口の手前左側には庚申塔と二十三夜塔、その右側には七地蔵が立っている。また、お寺の入り口には巨樹が生え、これは町指定天然記念物の榧の木で、実が付かないので雄株である。板碑はいずれも町指定有形文化財で、その内の１基には永享九(1437)年の紀年銘があり、岩室砦の存在時期とほぼ一致することから、その城主が建立したかもしれない。庚申塔や二十三夜塔がここに並んで立っていることは、この前の道がもともとの道筋であったろう。

宗龍寺入口と榧の木

宗龍寺本堂

宗龍寺入口前に立つ板碑

庚申塔と二十三夜塔

七地蔵

101. 台の子安様

宗龍寺から出て前の道を少し下った左側に、小さな鳥居とその奥に祠が鎮座している。祠の中を見ると、子供を抱いた女性を彫った木造神像が安置され、子安大明神が祀られた小さな神社である。台地区の女性の安産祈願の神様として、大事に信仰されてきた社であろう。

台子安神社の小祠

木造子安大明神像

102. 台星宮神社、台城跡

子安様からさらに坂を下りるとカーブになって、その右側の道より高い所に神社がある。階段を上がると社殿があり、その奥に平場を囲むように土塁が見える。ここは小川台台地の南に突き出した所になり、そこを抑えるために小規模ながら、城を構えたのであろう。おそらく岩室砦の出城としての機能を持たせたのであろう。神社の周りには、三山塔や古峰神社など、様々な石祠が並んでいる。

台星宮神社本殿

星宮神社裏の台城跡の堀割

103. 台大師堂

急な坂を下りきった所の左側に小堂があり、中に木造の弘法大師像が安置されている。お大師様は町内では普通石造であるが、ここでは木造で彩色されたきれいな像で、光では珍しいお大師様である。

台大師堂

104. 台堰の十九夜塔

台の集落から農免道路に出て南へ向かい、谷の中間点の小川の直ぐ脇にコンクリブロックで囲まれた石仏が鎮座している。丸彫りの如意輪観音像の十九夜塔である。町内にはこの様に水場の近くに立つ十九夜塔が多く、おそらく水子供養の為に造立されたものと思われる。ここの十九夜塔は、以前は野ざらしであったため、今はだいぶ風化が進んでいる。

台堰の十九夜塔

105. 台・虫生駒形遺跡、駒形城跡

堰の十九夜塔の所から西へ眺望すると、北へ突き出した山が見える。この山の上に台駒形遺跡があり、山全体が駒形城跡となっている。駒形遺跡は虫生地区にも広がり、縄文時代から平安時代の遺跡で、一部縄文中期の貝塚も存在する。

台の谷津から遠望する駒形遺跡・駒形城跡

住居跡から貝殻を検出

駒形遺跡出土の「匝瑳」銘墨書土器

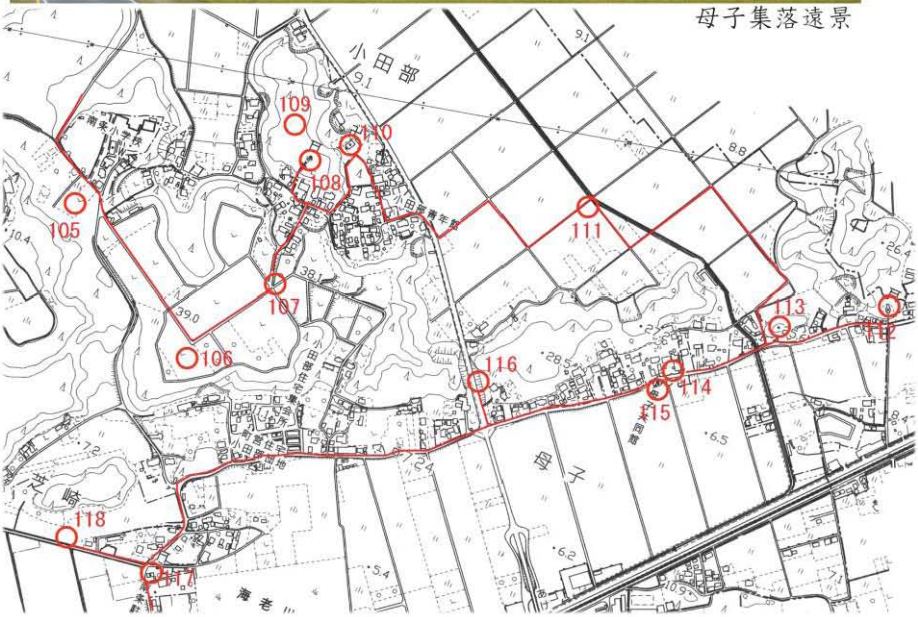
七．小田部・母子から芝崎へ

台の南が小田部で、その東が母子で匝瑳市との境になる。小田部は北へ突き出した台地と、南側に少し開けた平らな台地とからなり、集落は北の谷津に沿う様にあるのは、この辺の特徴である。また、南側は九十九里平野の最前面になり、砂州が形成されている所に集落がのる。小田部町営住宅のある所は、台地を削って造成した所であるようだ。

母子は九十九里平野の前面で、東西直線的に長く、北側の背後の山は侵食が進んだ台地で、ほとんど平坦地がなく丘陵の様になっている。母子の集落の前には、地形に沿う様に道が東西に走り、これが銚子まで続く街道で、古くから存在したと思われる。

小田部集落遠景

母子集落遠景



106. 小田部遺跡

駒形遺跡の向いに南条小学校を見て、台地が少し括れ、その先の台地の上を南へ行く道を行くと、平らな台地が広がっている。ここが小田部遺跡と呼ばれ、縄文から平安時代の遺跡となっている。標高39mあって、この縁から木の間を通して九十九里平野を望むことができ、古代人も平野を眺めながら暮らしただろう。

ほぼ平坦な台地の小田部遺跡

107. 小田部の道標

小田部遺跡を東に向かうと三叉路に当たり、その分岐の所に石柱と石祠が立っている。石柱の正面には大師像と「南無大師遍照金剛」両脇には行き先が書かれ、大師塔と道標とを兼ねた石塔であることが分かる。石祠は文字が無いが、おそらく道祖神であろう。

小田部の道標

108. 小田部星宮神社

三叉路を左に向い、少し坂を下がり突き当たりを左に曲がって右側に入る小道を上がると小田部星宮神社がある。山の中の小さな社であるが、きれいに掃除されていて、清浄さが漂う。この神社では毎年12月23日、火伏神事が行われる。これは江戸時代の天明三(1783)年、小田部で大火があったとき、たまたま神楽の面が保管されていたある家だけ、火災を免れたという事から、その面の御利益を得んと、子供たちが神楽面を被り集落を廻って火事よけを祈願する様になったと言われている。面は猿と獅子であり、獅子は三面あり、古い形をしていて、おそらく三匹鹿舞の頭と思われる。現在は鹿舞は行われておらず、その伝承も残っていない。

小田部星宮神社

火伏を行っている子供たち

109. 小田部城跡

星宮神社の北側の山が小田部城跡で、神社もその一部に含まれる。小田部城跡は中世匝瑳椎名党の一族が築城したと言われ、北に延びた台地を利用して、山上に堀を掘って曲輪を２～３造った城であるが、精細な調査をしていないためその構造ははっきりしない。岩室砦跡や芝崎城跡も同じ椎名氏の城跡で、同族でのネットワークを構築してこの一帯を領有していたのだろう。

小田部城跡の山

110. 小田部西運寺

星宮神社から少し東へいくと左に下り坂があって、そこを降り左に入った所に墓地と新しい建物が建っている平場がある。ここが小田部西運寺で、地区の檀家寺である。寺の本堂は最近建て替えられたばかりで、以前の様子は全く伺えない。本堂の左側には子安観音と地蔵の石仏があり、正面の階段を下りると右側には、六観音の石仏が立っている。

六観音は十一面観音や聖観音などで、地元では芝崎海老川の観音と合わせて七観音と呼んで信仰している。弘化五(1848)年造立で、屋根が架けられ、石仏はきれいである。

真新しい西運寺本堂

西運寺下の六観音

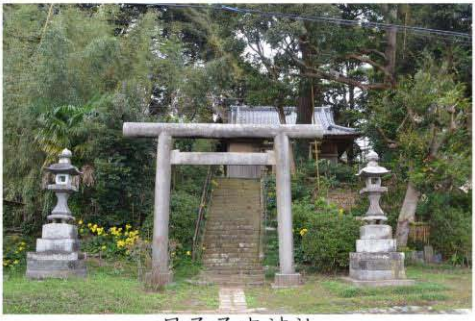
111. 小田部狐塚の十九夜塔

西運寺から農免道路に出て、その反対側の東に広がる田んぼの中に、コンクリブロックで造った小屋のようなものが立っているのが見える。行って中をのぞくと如意輪観音像を彫った十九夜塔が立っている。この十九夜塔の脇には水路が流れ、やはり水子供養のためにここに建てたことを伺わせる。しかし、小田部の集落からはちょっと離れた所にあるのが、水子供養の哀れさが感じられる。

小田部狐塚の十九夜塔

112. 母子子安神社

小田部狐塚の十九夜塔から水田の中を南へ行き、東西に走る旧銚子街道に出て東に行き、町の境まで行くと左側の山を少しあがった所に子安神社がある。ここの子安神社の社殿はそこそこの大きさで、拝殿は瓦葺であるが、最近はあまり手入れされていない様で、少し荒れが目立っている。母子と言う地名にはその謂れに悲しい話が今も伝わり、この子安神社もその遺跡の一つかもしれない。神社の裏山に上ると石祠があり、また、神社の前には庚申塔が立っている。



母子子安神社

子安神社前の庚申塔

113. 母子胎塚

子安神社からまた戻って、水路の手前の右側に小高い山があって、山の頂上には石祠がある。この山が胎塚と呼ばれ、この山の東側の家が胎姫と言う屋号が付けられている。この塚も母子の地名の由来にも係わっている。今から500年も前の室町時代、匝瑳市の須賀城の須賀某に小田部か芝崎から姫が嫁ぎ、子を妊娠し実家で生もうとした。そのとき須賀城が攻められたことを知った姫は、婚家へ駆けつけようとしたが、この地で夫の討ち死を知り、この先行くかどうか迷った。そのうちここで子を産み、その胎を埋めたのがこの胎塚と言われ、夫の死を悲しんで母子共にここで亡くなったので母子の地名が付いたと言う。また、母子を哀れんで祀ったのが、前の子安神社だと言う。

母子胎塚の山

114. 母子庚申塚

水路を越えてまた西へ行くと、右側に庚申塚が木の陰に隠れるようにある。像容の庚申塔が２基、自然石の文字塔が１基立っている。ここの庚申塔は母子集落のほぼ中央部にあり、他の集落の入り口にあるのとは場所が異なっている。しかし、街道に面して立つことによって、集落を守る役割があったのかもしれない。

母子の庚申塔

115. 母子の読誦塔

母子の庚申塚の旧道を挟んだ斜向かいに母子の集会所があり、その横に文字を刻んだ石塔が立っている。文字を読むと「百万遍読誦成就記念」と読め、通称読誦塔で裏に大正元年とあり、百年前の造立であることが分る。読誦塔は主に僧が修行の中で、お経を何回も繰り返し読んだことを記念して建てたものである。町内にはお寺の境内に多く建てられているのを見ることができ、江戸時代にお経を読む修行が良く行われていたことを示すものである。

母子の読誦塔

116. 小田部・母子の切通し

母子の旧街道をさらに西へ行くと、町の南北を走る農免道路に当たる。この農免道路は平成10年ごろに整備され、そのときここの切通しが少し開削され、その切通し面にきれいにな地層を見ることができた。ここで見られた地層は、上半分が褐色のやわらかい砂層で、下総層群の木下層にあたり、その下は固い灰白色のシルト層で、上総層群の金剛地層と思われる古い層が見られる。この九十九里平野に接する下総台地東端は台地が隆起してせり上がり、古い地層が地上に出ていることが知られる。

小田部・母子の切通し

117. 芝崎海老川の観音堂

農免道路を越えて旧街道を西へさらに行き、S字カーブを過ぎ南条駐在所の手前の左側に、少し開けて空き地のような所があり、その中に小さなお堂が建っている。このお堂に観音様が安置され、小田部の六観音と合わせて七観音のひとつである。おそらくここも本来はお寺であって、地域の信仰の

芝崎海老川の観音堂

場であったと思われる。境内にはお堂のほか、庚申塔、馬頭観音、千手観音などの石仏のほか、石祠も見られる。今は切り倒されてないが、大樹の切り株もあり、元は大樹に囲まれた古寺であったろう。

庚申塔

堂内の銅造救世観音と石造聖観音

馬頭観音

千手観音

弁財天石祠

118. 芝崎浅間山下の庚申塚

芝崎海老川の観音堂前から西へ行く道が分れ、そちらへ100mほど行くと、右側に庚申塚があり、像容塔と石祠の庚申塔が立っている。観音堂からは僅かの距離であるが、芝崎の東側にはこのように続けて庚申塔が立っているのに対し、西側には１基も見られない。

ここから芝崎海老川の観音堂前に戻り、旧街道を南へ行くと今の国道に出て、国道を渡り、コンビニの裏を行く道の旧道を行くと宮川橋場の交差点を経て、横芝駅に戻ることができる。

浅間山前の庚申塚

芝崎から東を望む

あとがき

ガイドブック２に所収した所は、旧光地区の北半分に当たり、侵食が進んだ下総台地と、その間に広がる水田地帯とで、松島のような景観を有する景勝の地と言っても良い所である。そこには古代から多くの人々の足跡が刻まれ、様々な遺跡が形成されてきた。中でも特徴として取り上げられるのが、中世の遺跡である。発掘調査された篠本城跡はじめ、台地のほとんどには中世城郭が造られ、低地にも進出して居館なども発見されている。またその頃から伝えられている民俗芸能「鬼来迎」もあり、まさに文化遺産の宝庫であると言え、町の誇りであると言っても過言でないだろう。この財を護りつつ、後世に残しながら、町の今後の発展に活用して行ければ、町の将来は明るいものとなろう。

このガイドブックを作るに当たっては多くのご協力頂きました。ここには機関等のみを記して御礼申し上げます。

横芝光町文化財審議会、横芝光町歴史ロマン研究会、生涯学習講座郷土を知る再発見の旅受講生、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県教育振興財団、芝山町立古墳はにわ博物館、房総石造文化財研究会、鬼来迎保存会、中台神楽保存会、宮内神楽保存会、鳥喰下大神楽保存会、屋形四社神社里神楽保存会

本書の執筆、編集は、横芝光町教育委員会社会文化課文化財担当道澤明があたった。内容についての文責は道澤に帰す。

横芝光町の文化遺産ガイド２

発行日　平成29年３月31日
発　行　横芝光町教育委員会
編　集　横芝光町教育委員会
　　社会文化課生涯学習班文化財担当
印　刷

横芝光町指定
有形文化財
隆台寺板碑